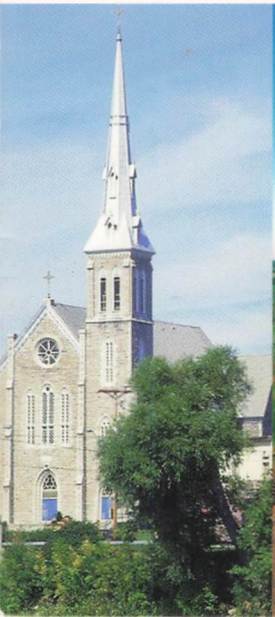
Daiso Romance Series 16

ハーブ・ガーデンでささやいて

紫野直子 *Victoria Dream and Wine*



Daiso Romance Series 16

ハーブ・ガーデンでささやいて

Victoria Dream and Wine

紫野 直子

目次

第一章　バンクーバーの朝　――3
第二章　ビクトリアの昼下がり　――37
第三章　オカナガンの夕暮れ　――114
第四章　カナディアン・ロッキーの夜　――146
第五章　ハーブ・ガーデンでささやいて　――196

第一章　バンクーバーの朝

1

（さよなら、私の恋……）

飛行機のタラップを降りるとき、霧島響子は、小さくそう呟いた。

よく晴れた青い空が広がっていた。

バンクーバー国際空港の到着フロアは広々として、明るく開放的だった。

ターミナルビルは、オープンしてまだ間もない。

その正面玄関には数本のトーテムポールが立ち並び、各フロアにはネイティブ・カナディアン（先住民族）のアートが飾られている。

（とうとう来たんだわ、この国に……）

響子は空港から一歩を踏み出し、深く息を吸い込んだ。

早春のカナダ。

午前八時。
三月の朝の風は、まだ少し冷たい。
だが、春の気配は、東京よりも濃厚に感じられた。
響子はターミナルビルの玄関前から、空港とダウンタウンの主要ホテルを結ぶエアポート・バスに乗り込んだ。
今日は、日本を発つ前に旅行会社で予約をしておいた、ホテル・バンクーバーに宿泊する予定だった。
エメラルド・グリーンの車体をしたエアポート・バスのシートは、ゆったりとしていた。
響子は後部のシートに深々と体を預けて、窓から移りゆくバンクーバーの街の景色を眺めた。
バンクーバー国際空港は、ダウンタウンの南西約十五キロ、ジョージア海峡に突き出た半島、フレイザー川の中洲にある。
バンクーバーは、モントリオール、カルガリー、トロントなどと並ぶカナダの大都市のひとつであり、カナダ西海岸の都市としては最大規模を誇る。
日本をはじめ、アジアやアメリカからカナダへ入国する際の西の玄関口だ。
エアポート・バスは、空港を出発すると99号線、すなわち、グランビル・ストリートを北上し、ショーシェネシー高級住宅街を抜けてダウンタウンに到達する。

バンクーバーのダウンタウンは、その西側に広がるイングリッシュ・ベイに突き出した半島部分だ。

半島の南部は、バラード・ブリッジと、グランビル・ブリッジという二本の橋で結ばれている。

バスは、グランビル・ブリッジを通過していった。

グランビル・ブリッジのアーケードに、「ウェルカム！　グランビル・アイランド」と書かれたネオン・サインが掲げられているのが見える。

ここ、フォールス・クリークに浮かぶ小さな半島、グランビル・アイランドは、一九五〇年代はカナダの造船業の中心として栄えていた。

が、その後、徐々に衰退し、ゴーストタウンと化していた。

その街が、一九七〇年の再開発で蘇り、今やパブリック・マーケットやレストラン、映画館、アート・スクールなどが立ち並び、ファッショナブルで活気に溢れるエリアとなっている。

エアポート・バスの自動音声ガイドが、そんなことを解説してくれた。

グランビル・ブリッジを過ぎると、いよいよダウンタウンだ。

エアポート・バスがダウンタウンに入ってしばらく進むうちに、響子はグランビル・ストリート沿いに桜の木が植えられていて、その桜並木がすでに花を咲かせていることに気がついた。

カナダのこんな街の中心部に、桜が植えられていることも意外だった。
だが、響子は、こんな早い時季に開花した桜の花を見ることができたことに、さらに驚いていた。
東京の桜の開花は、まだもう少し先だ。
響子は日本で、桜を見ずに旅立ってしまったのだと思った。
ここブリティッシュ・コロンビア州は、カナダでも気候が温暖な地帯に属していて、春の訪れも早い。
二月も半ばを過ぎると、春の花が次々に咲きほころび始める。
バンクーバーにも、植物園や庭園など花の名所がたくさんあるが、響子の旅の目的地は、ブリティッシュ・コロンビア州の州都ビクトリアだった。
ビクトリアの街は、バンクーバーの西にジョージア海峡を隔てて浮かぶバンクーバー・アイランドの南端に位置している。
街中に四季折々の花が色鮮やかに咲きあふれて、花の都と呼ばれるにふさわしい自然環境に恵まれた美しい街だ。
日本でガーデニング・プランナーの仕事をしていた響子は、暮らしの中にガーデニングが一体化して溶け込んでいるビクトリアの街に、ずっと憧れを抱いていた。
いつかビクトリアのような街で暮らし、生活に密着したガーデニングを本格的に学んでみたいと思い続けていた。

そして、その夢をついに実行に移したのだ。
きっかけは、苦い恋の結末だった。
先の見えない恋に苦しみ、とうとう耐え切れなくなってそこから逃げ出した。
響子は、五年越しの恋人への想いを断ち切ろうと決めて、日本を飛び出したのだった。

神崎純一郎は、ついに成田空港の出発フロアに姿を見せなかった。
来てくれるものと、響子は高をくくっていた。
そして、引き止めてくれると思っていた。
だが、純一郎は来なかった。
引き止めてほしかったのだろうか？
今でも純一郎を愛している。
その気持ちが断ち切れずに、今、この瞬間も苦しんでいる。
だが、純一郎には妻と十二歳になる娘がいた。
妻子のある純一郎との恋愛は、響子の精神を想像以上に消耗させていった。
おそらく純一郎も家族と響子との間で苦しみ、疲れ果てていたはずだ。
響子よりも九歳も年上で、ずっと大人だった純一郎……。
いつも、どんなときも優しかった人……。
忘れることなんてできない。

（だけど、忘れなくちゃ……）
実りのない恋など、早く吹っ切ってしまうほうがいい。
そして、人生を新しく始めるのだ。
そのために、こうしてこの国にやってきたのではないか。
だが響子は、純一郎が空港に現われなかったことに、強い失望を覚えた。
けっして幸福になれない恋だと頭ではわかっていても、心はあいかわらず純一郎を求め続けている。
たとえどんなに他人を不幸にしたとしても、どうしても純一郎の愛が欲しい。
そう願う瞬間があった。
そのためだったら、どんな犠牲を払ってもかまわない。
そんな強い衝動に突き動かされて、いてもたってもいられなくなり、真夜中にふらふらと街にさ迷い出て、気がついたら純一郎の住むマンションのエントランスホールに立っていたこともあった。
響子はそんな自分を持て余し、恐ろしいと感じ始めていた。
あまりにも強く、純一郎を愛しすぎてしまっている。
このまま純一郎との関係を続けていると、そのうち響子は自分で自分が抑えられなくなってしまう。
そして、いつか、とんでもないことをしでかしてしまうかもしれない。

危険で、凶暴な心が牙を剥き始めていた。
純一郎の妻と娘さえいなくなれば、彼は響子だけのものになる。
響子は、純一郎の妻と娘の不幸を願っている自分を醜いと思った。
妻と娘さえ消えてくれれば……、死んでくれれば……。
いっそ、この手で殺してしまいたい……。
そんなことを考えてしまう自分に恐怖した。
一刻の猶予もならないような気がした。
だから、こんなふうに逃げ出すしかなかったのだ。
純一郎と出会う前の平静な心を取り戻せるのなら、どんなことだってする。
これほどまでに激しく燃えた恋の炎がすっかり消え去るまで、少し時間はかかるかもしれない。
けれど、もう一度少女のころの、あの凪いだ海のような心に戻りたい。
心底、響子はそう思った。
夢と憧れだけを食べて生きていたあのころに……。

響子は、純一郎が空港に来てくれるかどうか、心の中で賭けをしていた。
おそらく、純一郎は慌てて飛んでくる。
そして、「行くな」と言ってくれると思っていた。

純一郎の愛を確信していたのだ。
だが、彼は姿を見せなかった。
響子を引き止めてはくれなかった。
セキュリティチェックで手荷物を預け、金属探知ゲートをくぐる直前、最後にもう一度だけと、フロアを振り返った。
ふいに哀しみがこみ上げてきた。
涙が滲んで視界がぼやけた。
(さよなら、純一郎……)
やがて響子は、ゲートに並ぶ人の列に押し出されるように、前へと進んだ。
もう、後戻りはできない。
自分は、大切なものを失ってしまったのだと思った。
だが、その一方で響子は、心の奥底にかすかな安堵の感覚が芽生えているのを感じていた。
それは、不思議で、奇妙な感覚だった。
胸を錐(きり)で刺し通すような鋭い痛みの裏側で、じんわりと温まった石を抱いているような感覚……。
その温かい石の熱が、体中に伝わっていく。
緊張がほぐれ、徐々に痛みも薄れていく。

機内の座席に着くころには、涙も乾いていた。
それでも、感情の波は嵐のように襲ってくる。
瞬きすると、瞼の裏に残像のように純一郎の優しい笑顔が浮かぶ。
恋の麻薬が切れるときの、禁断症状のような痛みだった。
(でも、これでよかったのよ、もっと強くならなくちゃ……)
響子はフライトの間中、そんなふうに何度も自分に言い聞かせて、切ない気持ちをやり過ごした。

成田の新東京国際空港から日本航空でバンクーバー国際空港まで、約八時間半の空の旅だった。時差は、今の時季は十七時間。
だが、サマータイムの期間は十六時間になる。
東西に広大な面積を有するカナダは、なんと、標準時間帯が六つも設けられている。
バンクーバーでは、「太平洋岸標準時」が用いられている。
それから、東に「山岳部標準時」、「中部標準時」、「東部標準時」、「大西洋標準時」と一時間ずつ時間が進む。
さらに「ニューファンドランド標準時」があって、これは三十分だけ、時間が進む。
サマータイム制度は、四月の第一日曜日から十月の最終土曜日までだ。
日本のように、標準時がひとつしかない国から想像すると、一国の中で六つもの異な

った時間があるなんて、ずいぶん面倒な気がする。
国内を旅行する際にも、時計を進めたり、遅らせたりしなければならないわけだ。
それはさておき、日本を夕方に出発すると、バンクーバーの到着はその日の朝になるということになる。
つまり、出発した時刻から八時間半前に戻ることになるのだ。
そう考えると、その分の時間を得したようで、なんだか愉快だった。今日をもう一度やり直せるのだから。
バンクーバーに到着した後に備えて、機内で少し睡眠をとっておこうと思った。
だが、やはりどうにも気持ちが高揚しているようで、じっと眼を閉じていても、響子はうまく眠ることができなかった。
出された機内食を食べ終え、バンクーバー国際空港に到着する間際に、ほんの少しだけうとうとした。
やがて、着陸を知らせるランプが点灯した。
(これじゃあ、時差ぼけしてしまいそうだわ……)
と、響子は思った。
飛行機のランディングが完了し、シートベルトを外して席を立つと、地面が妙に柔らかく感じられ、足もとがふらついた。

ふくらはぎが浮腫んで、ぱんぱんに張っていた。
響子は、もう一度シートに座って、足首から膝にかけて何度か揉みほぐしてみた。
そうすると、ようやく血行が戻ってきて、どうにか普通に立って歩くことができるようになった。
だが、どうにも体が重く感じられる。
エアポート・バスに揺られているうちに、響子は強い睡魔に襲われた。
ホテルにチェックインしたら、少し眠ろう。
その先のことは、目が覚めてからゆっくり考えればいい。
時間はたっぷりあるのだから……。
もう焦ることはないのだ。
そう考えると、すっと気持ちが軽くなった。

2

ホテル・バンクーバーは、ダウンタウンを東西に走るジョージア・ストリートに面して、厳めしい表情で建っていた。
一九三九年に開業した老舗のホテルで、ダウンタウンのランドマークと呼ぶにふさわしいと聞いていた。

実際に、青銅の屋根を持つ城塞のようなその外観を目にしたとき、響子はすっかり圧倒されてしまった。

広々としたエントランスの床は、ぴかぴかに磨き上げられた大理石が敷きつめられていて、荘厳の一言に尽きる。

（こんなに立派なホテルだったなんて……）

日本の旅行会社に薦められるままこのホテルに宿泊することを決めたのだが、正解だったと響子は思った。

客室に入った響子は、重厚なヨーロッパ調の家具の素晴らしさに、再び息を呑んだ。

部屋の奥に進み、カーテンを開けて窓の外を見ると、朝の活気に満ちていくダウンタウンが一望できた。

なんだか眠るのがもったいないような気がした。

しかし、見るからに寝心地のよさそうなベッドに軽い気持ちで横たわった響子は、あっという間に眠りに落ちていた。

目を覚ましたのは、正午を少し過ぎたころだった。

少し眠ると、頭がすっきりとした感じだった。

響子は、再び窓からダウンタウンを見下ろした。

そうしていると、空腹を感じた。

（私ったら、眠って、お腹が空いて、まるで動物みたい……）

響子は、苦笑した。
「食欲と、睡眠欲と、性欲を、同時に感じたらどうする？」
ずっと以前、誰かとそんな会話を交わしたことを思い出した。
まだ、性的にも未成熟なころだった。
「そうねえ、やっぱりまず食べるかな。お腹が空いてると眠れないからね。それからぐっすり眠って、起きて元気になってからセックスする」
確か、そんなふうに答えた。
それは、ただの子供の答えだ。
食べたいときに食べ、眠りたいときに眠った。
そして、切実に性欲を感じることなどなかった。
どんなに空腹を感じても、何も食べる気になれないことがあるなんて、考えもしなかった。
眠りたくても眠れずに、夜を明かすことがあるとは思いもしなかった。
そして、誰かを愛して、ただの女として、性的な欲望に身もだえすることがあるなんて、想像もしなかった。
「セックスは、したくなっても相手がいないとできないね」
そんなことを冗談のように言って、笑い転げていた。
純一郎と出会うまで、ほんとうの恋など知らなかった。

一人きりの寂しさを埋められなくて、純一郎に抱いてほしくて、胸が引き裂かれるような、焦がれるような夜を、いったい幾度過ごしたことだろう。
どんなに求めても、応えてもらえない苦しい夜。
純一郎には家庭があった。
今頃、こんなふうに響子を独りぼっちにしておいて、純一郎は家族との時間を過ごしている……。
そんなことは考えまいとしても、純一郎が妻と娘と食卓を囲み、一家団欒している風景が脳裏に浮かんでくる。
幸せそうな光景を想像してしまう。
響子は純一郎を愛するようになってから、孤独を恐れるようになった。
一人で過ごす夜の重さに耐え切れない。
そんなことは、それまでなかった。
純一郎の家族に強い嫉妬を感じてしまう、そんな自分の心を醜いと思った。
どんどん惨めな気持ちに、心が蝕まれていく。
そんな自分に耐えられなくなってしまったのだ。
純一郎を愛すれば愛するほど、いっしょにいられない時間の重さ、底なし沼のような孤独を埋めることができない。
毎夜、響子のところに帰ってきてほしいと願う。

そして、抱きしめて、抱きしめられて眠りたい……。
とどまることなく膨張していく欲望は、ブラックホールのようだった。
その響子の心の中に巣食った暗く深い闇は、周囲を破壊し、すべてを呑み込んで、どんどん大きく膨らんでいく。

どうして不倫などしてしまったのだろう。
もっと明るい、後ろ指を差されることのない恋がしたかった。
それなのに、何故なんだろう。
気がつくと、純一郎しか愛せなくなっていた。
一級建築士をしている純一郎とは、仕事を通じて知り合った。
純一郎の設計した家に見合う庭を、響子がプランニングすることになったのだ。
そのころはまだ専門学校を卒業したばかりで、響子は、ガーデニング・プランナーとして、駆け出しだった。
少しでもいい仕事をしようと張り切るあまりに、肩に力が入りすぎていたところがあったかもしれない。
純一郎はそんな響子をうまくリードして、響子のセンスを認め、最高のものを引き出してくれた。
純一郎との初仕事は、それまでになく、驚くほどリラックスして完成させることがで

きたのを、今でもよく覚えている。
まるで魔法にかかったみたいだった。
それから何度か、いっしょに仕事をする機会に恵まれた。
そして二人の距離は、だんだん近づいていった。
感性が似ていたのかもしれない。
常に互いのセンスを尊重し合って、いい仕事ができた。
そして、互いに仕事を超えた何かを感じるようになっていったのだ。
親密な関係になったのは、五年前、純一郎が設計した教会で行なわれたクリスマス・パーティの夜だった。
教会の前庭で、立食形式のガーデン・パーティが開かれたのだ。
響子は、シンボルツリーのもみの木や、ゴールドクレストの飾り付け、そしてガーデン全体のイルミネーションを担当していた。
すでにそのころ、響子は純一郎に対して、建築家として尊敬する気持ち以上の思慕を感じていた。
そして、純一郎が響子に向ける眼差しの中にも、はっきりと愛情を感じとっていた。
けれど、だからといって、いったいどうすればいいというのだ。
純一郎には家庭がある。
心を打ち明けたところで、どうなるというのだ。

苦しい思いをするのは、目に見えていた。
これ以上、純一郎への恋心を募らせてはいけない。
危険地帯に踏み込もうとする響子に、体中が警告のシグナルを発していた。
だが、ついに、心の掛け金が外れる瞬間がやってきた。

その夜のパーティは、マスコミ各社の注目を集め、大成功を収めた。
そして響子は、パーティの後、純一郎に呼び出された場所へと向かった。
パーティの合間に、純一郎に誘われたとき、響子は、とっさのことで断わるタイミングを逸してしまった。
ほんとうは、純一郎がこんなふうに誘い出してくれることを、心のどこかでずっと待っていたのかもしれない。
純一郎が指定したのは、都内に新しくオープンしたばかりの外資系ホテルのスカイラウンジだった。
窓からは、きらきらと輝く東京の街が見下ろせる。
そこで純一郎と二人きりで祝杯をあげた。
仕事を離れてこんなふうに二人きりになったのは、意外にもそれが初めてのことだった。
店内は、クリスマスのデートを楽しむ若いカップルたちでいっぱいだった。

こんなふうに、クリスマスを特別扱いして、こんなところでデートを楽しむステレオタイプな恋人たちを、響子は今まで馬鹿にしていた。
そんな自分が、今、ここに座っている。
そう考えると、恥ずかしくなった。
純一郎がこんな人気のデート・スポットを知っていることも、少し意外だった。
(もっと純朴な人だと思っていたけれど、意外と遊び人なのかしら……)
ふと、そんなことを思ったりした。
ソムリエがシャンパンを持って現われ、グラスになみなみと注いでくれた。
響子は、シャンパングラスを持ち上げて、
「ご成功、おめでとうございます」
と、改めてお祝いの言葉を述べた。
超高級ホテルのラウンジの窓際の席に着いて、東京の夜景を眺めながらシャンパンで乾杯する。
こんな贅沢は、響子には初めての経験だった。
「君のおかげだ。素晴らしいパーティになったよ」
純一郎は、いつもに増して上機嫌だった。
パーティの席で飲んだ酒が醒めきらずに、頬が上気したままだ。
「私は、なんにも……」

シャンパングラスにそっと口をつけながら、響子は微笑んだ。
「いや、今夜のイルミネーションは実に幻想的だった。まったく、君のセンスの良さにはいつも驚かされる」
と純一郎は、賞賛の眼差しで響子を見つめた。
「ありがとうございます。神崎先生にそんなふうにおっしゃっていただけるなんて、ほんとうに嬉しい……」
響子は、はにかんで目を伏せた。
「私、先生の設計された建物を見ていると、いつも、自然にイマジネーションが湧いてくるんです」
それは正直な気持ちだった。
(ほんとうに不思議なほど……)
純一郎の設計する建築物は、響子の感性にすんなりと馴染む。
そこに住む人のことを想像すると、造りたい庭のイメージがひとりでに浮かび上がってくるのだ。
純一郎は、教会やビルなど大きな建築物も手がけていた。
だが、仕事の中心は個人から依頼される注文建築で、響子は、それぞれの依頼主の希望を取り入れて純一郎が設計する住宅が大好きだった。
どこか暖かく、そこで暮らす人の息遣いを感じることができる家……。

その家に見合ったガーデンをプランニングすることができるなんて、自分は幸せだと響子は思っていた。

「それにしても、先生、よくこんなお洒落な場所、ご存じでしたね」

シャンパンの酔いがまわってきた響子は、つい、そんな言葉を口にした。

いつもこんなふうに女性を誘っているのか、少し気になっていた。

「ああ。実は、ここのホテルのオーナーと知り合いでね、ときどき利用させてもらっているんだ。それに……」

「それに……？」

響子は、思わず問い返す。

「今夜こそ君を誘い出そうと思って、パーティが始まったときから、虎視眈々と狙っていたのさ……」

純一郎は、照れたように笑った。

「やだ、先生、虎視眈々だなんて……」

響子は、軽く純一郎を睨んだ。

「いや、これは失礼。どうもこういうことは慣れていないものだから……」

そう大真面目に言う純一郎の様子が、なんだか悪戯を咎められた子供のように見えて、響子は少し笑ってしまった。

「僕は、今夜ここに泊まるんだけど……」
ラウンジを出てエレベーターホールに行く途中で、純一郎は言った。
誘いきれずに、戸惑っているような口調だった。
響子は顔を上げて、純一郎の目を覗き込んだ。
ためらい、脅えているような瞳……。
このまま踏み込んで、後悔せずにいられるのだろうか。
響子は少しだけ迷って、やがて、自分のほうから純一郎に腕を絡めた。
「私、先生といっしょにいたい……」
そしてその夜、響子は純一郎と結ばれた。
純一郎の部屋は、本当なら、何カ月も前に予約をしても泊まれるかどうかわからないような、最上階のスイートルームだった。
窓から、東京の街が一望できる。
林立する高層ビルのジャングル。
多くの窓に、まだ明かりがともったままだ。
(今夜は、クリスマスなのね……)
この街で、何組もの恋人たちがこんな夜を過ごしている。
(私たちも、その中の一組……)

窓にもたれて外を眺めている響子の背中に、純一郎が体を重ねてきた。
背後から抱きしめられると、響子は息が止まりそうな気がした。
心臓が二倍の速さで動き出したようだ。
純一郎は、響子の右肩に置いた手にぐいっと力を入れて自分のほうに向き直らせ、ぎこちなく唇を重ねてきた。
(熱い……)
純一郎の唇は、驚くほど熱を帯びていた。
胸の鼓動が聞こえる。
こんなことは慣れていない、と言っていた言葉に嘘はないようだった。
燃えるような口付けのあと、純一郎は響子を抱き上げ、ベッドへと運んだ。
ワンピースの背中の、ジッパーを下げようとする純一郎の指先が震えている。
響子は純一郎に体を預けて、じっとしていた。
純一郎は、もどかしくなるほど時間をかけて、響子の服を脱がせていった。
ブラジャーのホックが外され、白い乳房があらわになると、純一郎は自分の服を脱ぎ捨てて、荒々しく覆いかぶさってきた。
響子は純一郎の胸に頬をつけて、体が熱くほてり始めるのを感じていた。
純一郎は響子の唇に熱烈なキスを繰り返し、胸のふくらみを強くまさぐった。

「先生……、純一郎さん……」
響子は真っ白いシーツの上で、息も絶え絶えに純一郎の名を呼んだ。
体の芯のうずくような感覚が、響子の理性を麻痺させていく。
やがて響子の最後の下着を取り去った純一郎は、ゆっくりと響子の中に入ってきた。
響子は、一気に押し寄せてきた快感に、純一郎の背中に回した腕に力を入れてかすかに顔をゆがめた。
そして、嗚咽とともに何度も何度も純一郎の名を呼んだ。

夢のような時間を過ごしたその夜から、響子は夢中で純一郎を愛した。
響子の生活を取り巻くすべてが純一郎を中心に回り始め、それ以外のことが何も収拾して考えられなくなってしまった。
人生のすべてが、純一郎の色に染まっていく。
まるで、エアポケットに落ちたような五年間。
時間が切り取られて、止まってしまったようだった。
当然、仕事にも影響した。
情緒が不安定になっていることを悟られないように、人前では感情の波を必死で抑えていた。
だが、時に急に無力感に襲われて、涙が止まらなくなったかと思うと、突然はしゃぎ

だしたくなる。
自分で自分がコントロールできなくなっていった。
こんなことを長く続けていてはいけない。
何度も、そう思った。
引き返そうと心に決めた。
しかし、純一郎のいない生活など、響子にはもう考えられなくなっていた。
初めて真剣に別れを決意したのは、あるとき行なわれた夫婦同伴のパーティの席上で、純一郎の妻と娘を見たときだった。
純一郎の妻を名乗る女性は、美しく、気品のある、落ち着いた大人の女性だった。
パーティのスピーチでは、おしどり夫婦だと紹介されていた。
そして、来年、中学生になるという娘は、何不自由なく育てられたことが一目でわかるような、非の打ち所のない可愛らしいお嬢さんだった。
二人は当然のように純一郎の隣に並んで立ち、幸せそうに微笑んでいた。
実際にその姿を自分の目で見るまでは、響子にとって、純一郎の家族は現実感を伴わない幻影のような存在だった。
純一郎を愛する気持ち、そして純一郎に愛されることだけが、二人の関係のすべてだと思っていた響子は、いきなり冷水を浴びせられたような、大きなショックを受けた。
純一郎は自分だけのものではない。

すべては錯覚だったのだ。
そう悟ったその日、響子は雨に濡れた子犬のように一人で自分の家に帰り、膝を抱えて泣いた。
誰にも祝福してもらえない不倫をしている。
自分は罪を犯しているのだという事実が、響子の心に重くのしかかってきた。
が、どんなに別れを心に決めても、純一郎に会って、優しい声を聞き、温かい手に触れてしまうと、それを言葉に出して告げることなどできなくなった。
純一郎をどれほど愛しているか、思い知らされてしまう。
その愛を消す方法など、どこにもないと思い知らされるのだ。
そして純一郎は、「家族は大切だが、ほんとうに心から愛しているのは響子だ」と、何度も繰り返して言ってくれた。
その言葉を頼りにして自分を支えてきたが、もう限界だった。

（そして私は、結局、こうして逃げ出したんだわ）
だけど、ほんとうは引き止めてほしかった。
空港に追ってきて、「行くな」と言ってほしかった。
純一郎を家族から奪い取って、自分だけのものにしたかった。
愛しているという純粋な気持ちも、いつのまにか、相手を束縛し、独占したい気持ち

に支配されてしまうものなのだ。
それでもいい。
今も、こんなに純一郎が恋しい……。

3

窓の外を眺めながら物思いに耽っていた響子は、はっと我に返った。
空腹で胃のあたりがきりきりと痛んだ。
(だめ、だめ。ぼんやりしていると、すぐに純一郎のことを思い出してしまう……)
ここはカナダだ。
響子は、すでに新しい一歩を踏み出したのだ。
過去をいつまでも引きずっていてはいけない。
(私は、夢を実現するためにこの国にきたのよ……)
響子は、自分の心を戒めた。
シャワーを浴びて気持ちを切り替えたら、ダウンタウンに出てみよう。
洒落たレストランを見つけて、美味しいものを食べて元気を出そう。
ダウンタウンにも見どころがたくさんあるし、せっかくだから、どこか公園に行って自然に触れるのもいいわ。

外は、晴れている。
（もっと、強くならなくちゃ……）
響子は、旅行鞄からバンクーバーの地図と観光ガイドを取り出した。
そして、適当なレストランを探し始めた。

バンクーバーのダウンタウンのストリートは、縦横が碁盤の目のように直角に交わり、整然と区画されている。
響子の泊まっているホテル・バンクーバーの前を東西に伸びているのが、ジョージア・ストリート。
そして、その一本南側を平行して走るロブソン・ストリートが、ダウンタウンのメインストリートになっている。
西のスタンレー・パークから、東のブリティッシュ・コロンビア・プレイス・スタジアムまでを、まっすぐに結ぶ道である。
そして、ロブソン・ストリートとホーンビー・ストリートの交わる角には、バンクーバー美術館があった。
（美術館に行くのもいいかも……）
バンクーバー美術館では、カナダの先住民族、ネイティブ・カナディアンたちのアートが数多く見られるという。

ネイティブ・カナディアンの生活には、少し惹かれるものがあった。
響子は、美術館の南側にあるロブソン・スクエアと呼ばれる広場へと向かうことにした。
エアポート・バスの窓から、桜が咲いているのが見えたところだ。
ロブソン・ストリートは、実に賑やかな繁華街だった。
通り沿いに、流行の最先端をいくブティックや世界各国のレストランなど、大小さまざまなショップが立ち並んでいる。
ロブソン・スクエアの近くに洒落たオープン・カフェを見つけて、響子はそこで遅い昼食をとった。

その日は、ほんとうによく晴れて、気持ちのいい午後だった。
(やっぱり、公園に行こう!)
そう決めると、響子はジョージア・ストリートをまっすぐ西に歩いてスタンレー・パークへと向かった。
スタンレー・パークは、バラード入り江に突き出た半島状の土地に広がるカナダ最大の私立公園だった。
四百ヘクタールの面積を誇り、その広さは、日比谷公園の約二十五倍にあたる。
もともとはネイティブ・カナディアンのコーストセーリッシュ族が暮らしていた土地

で、現在は政府が永久的に借り入れ、市民に開放している。
公園の入り口からは外縁をぐるりと巡る、シーウォールという約十キロのサイクリング・ロードが整備されていた。
レンタサイクルを利用して、右に海を、左に森を見ながら、時計と反対回りに公園を一周することができるという。
自転車で十キロも走れるかどうかちょっと心配だったが、なんだか無性に体を動かしたくなって、響子は、サイクリングに挑戦することにした。
「なんて気持ちがいいのかしら！」
海からの風を受けて、無心で懸命にペダルを漕ぐうちに、響子の心の中にも爽やかな風が吹いてきた。
出発地点から右に進み、ヨットクラブの前を通り過ぎ、ナイン・オクロック・ガンという観光ポイントに達した。
その名前の由来は、ここではかつて漁港への寄港の合図として、毎晩九時に大砲を撃ったことからきているらしい。
そして、そのすぐ近くにトーテムポール・パークがあった。
七本のダイナミックなトーテムポールが、海に向かって立っている。
サイクリング・センターでもらった公園のガイドマップによると、これらのトーテムポールは、すべてブリティッシュ・コロンビア州の西海岸に住む先住民の各部族によっ

て彫られたものらしい。
それぞれのトーテムポールには、各部族の特徴や伝説が表現されているという。
トーテムポールは、太平洋の北西沿岸にだけ見られる先住民文化で、それぞれの部族を象徴するシャチやクマ、カラス、ビーバーなどの動物、一族の伝説の人物などが、レッド・シダーの大木にユニークに彫り込まれている。
スタンレー・パークのトーテムポールがすべて海側を向いて立っているのは、海からの客を迎え入れるゲートとしての役目を果たすためだ。
かつては、家の前に立てられたり、支柱に使われたりしていた。
死者を弔う墓標としている部族もあるという。
しかし、カナダ政府が白人文化への同化政策をとり、ネイティブ・カナディアン文化が否定された時期には、トーテムポールが破壊されたり、伝統儀式が禁じられたりするようになってしまった。
そして先住民たちは、トーテムポールを新しく製作しなくなってしまった。
現在では、カナダ各地に残されたオリジナルのトーテムポールの多くは、博物館で保護されているということだ。
響子は、トーテムポールに彫り込まれた動物や人の表情を見つめているうちに、何か圧倒されるような力強さを感じ、その不思議な魅力に惹き込まれた。
中でも、柱の最上部に羽を広げているサンダーバードという伝説の鳥が気に入った。

トーテムポールには、ネイティブ・カナディアンたちの祈りや生きる力が込められているような気がした。

そこには、自然を畏敬し、豊かな発想を持って生きてきた先住民たちの長い歴史が秘められているからなのだろう。

響子は、しばらくトーテムポールを眺め続けていた。

気を取り直してさらにシーウォールを走っていくと、ノース・バンクーバーへと続く橋に辿り着いた。

全長千五百メートルのライオンズ・ゲート・ブリッジだ。

その橋のたもとを通り過ぎたあたりから、上り坂がきつく感じられるようになり、響子は何度か音を上げそうになった。

だが、ようやく公園の北端にあたるプロスペクト・ポイントに到達すると、そこには疲れも吹き飛ぶような絶景が広がっていた。

ここが園内で、最も高い位置にあたるビュー・ポイントだという。

船や水上飛行機が、海を行き交っている。

さっき通り過ぎたライオンズ・ゲート・ブリッジの向こうに、ノース・バンクーバーの山々が美しく聳え立っていた。

そこからは、比較的なだらかな下り坂が続いた。

一キロほど進んだところには、ホロー・ツリーと呼ばれる、中が空洞になったレッド・シダーの巨木があった。
樹齢八百年とも千年ともいわれている老木だ。
恐る恐る木の幹に手を当て、耳を近づけてみた。
この木は、気が遠くなるほどの長い長い間、ここにこうして静かに立ち続けてきたのだ。
そう思うと響子は、しみじみと大自然の奥深さを思い知らされる気持ちだった。
その少し先にあるビーチで、再び響子は自転車を止めた。
日光浴にもってこいの場所だったが、もう太陽は西に傾きかけていた。
バンクーバー・アイランドが、夕陽を背景にキラキラと輝いて見える。
あの島の南端に、憧れのビクトリアの街がある。
響子は、四月から、ビクトリアの郊外にあるガーデニング・スクールに通うことが決まっていた。
入学手続きは、日本ですでに済ませていた。
スクールの入学予定日まで、まだ少し日数がある。
(それまで、何をして過ごそうかしら……)
バンクーバーにも、植物園や公園など、訪れてみたい場所がたくさんある。
けれど、気持ちはすでにビクトリアに吸い寄せられていた。

（明日、ビクトリアに渡ろう）

そう決めると、うきうきとした気持ちになった。

ビーチでしばらく休憩したあと、一気にイングリッシュ・ベイに沿って続く残りのロードを走り抜け、ロスト・ラグーンという池に辿り着いた。

そこは見事な桜の園だった。

ロスト・ラグーンの真ん中あたりから、高々と噴水が噴き上がっている。

（あ、あれは！）

池のほとりに目をやったとき、響子は小さな動物がいることに気がついた。

（アライグマかしら……）

豊かな自然が溢れるスタンレー・パークには、カナダガンやアライグマなど、野生動物が棲息しているという。

「来てよかった……」

夕方の風にはらはらと舞い散る桜の花びらの下で、響子は呟いた。

そして、思い切り息を吸い込んで、大きく深呼吸した。

心地よい疲労感が体を満たしていた。

こんな充実感を感じるのは、いったいいつ以来だろうと思った。

ホテルに戻ると、もうディナーの時間だった。

サーモンやロブスターなど、新鮮なシーフードをメインにした豪華なディナーを堪能し、響子はその夜、何もかも忘れてぐっすりと眠ることができた。

そして翌朝、目を覚ますと、体中に気力が漲っているのが感じられた。

（大丈夫、私、この国で頑張れる。きっと、新しい人生を見つけられるわ！）

あのネイティブ・カナディアンのトーテムポールから、生きる力を分け与えてもらったような気がした。

（さあ、いよいよビクトリアに出発よ！）

響子は、バスルームでごしごしと歯を磨きながら、鏡の中の自分にニッと微笑みかけた。

昨日までとは違う顔をした響子が、そこに映っていた。

第二章　ビクトリアの昼下がり

1

バンクーバーからビクトリアへの交通手段として、飛行機や水上飛行機を利用すると三十分程度で行くことができる。

だが、響子は、バスとフェリーを利用する方法を選んだ。

バンクーバーのバスディーポからバスに乗って南下し、トゥワッセンの港からバスごとフェリーに乗り込む。

そして、バンクーバー・アイランドのスワーツ・ベイを経由して、ビクトリアのダウンタウンのバスディーポに到着するのだ。

この方法だと移動に三時間半はかかってしまうが、フェリーから海の景色を楽しむこともできる。

運賃も、飛行機に比べてずっと低予算ですむ。

そもそも、急ぐ必要などどこにもない旅だった。
フェリーで海に浮かぶ島を眺めながら、のんびり行きたいと思った。
ビクトリアはブリティッシュ・コロンビア州の州都で、カナダの中で最も英国の文化と習慣が色濃く残っている街だ。
「ビクトリア」と名のつく場所は、世界中にたくさんある。
もちろんこれは、英国のビクトリア女王にちなんだ名称である。
カナダのビクトリアは、一八四三年、毛皮交易商のハドソン・ベイ・カンパニーの西部地方本部が築かれ、交易の街として出発した。
当初は小さな街にすぎなかったのだが、一八四八年、アメリカのカリフォルニアで金鉱が発見されると、多くのアメリカ人たちがビクトリアに流入してきた。
バンクーバー島にもゴールド・ラッシュの波が押し寄せ、その物資の供給基地として栄え始めたのだ。
当時の英国植民地提督、ジェームズ・ダグラスは、この事態を憂慮した。
そして、ビクトリアがアメリカの手に落ちる前に先手を打って、バンクーバー島を英国直轄統治領と宣言したのだった。
以来ビクトリアは、英国気質を保ち続けてきた。
英国統治の伝統が、ビクトリアにアフタヌーン・ティーを楽しみ、ガーデニングに精魂を傾けるという、古き良き時代の英国流の暮らしを根付かせたのである。

自然環境も申し分なく、年間降水量が六百八十ミリと少なく、温暖で、冬でも気温が零下になることはない。

ビクトリアの街は、カナダ人が「最も暮らしたい」と望む街でもある。

とりわけ、老後この地に移り住もうとする人の数はあとをたたない。

「花の街」という名にふさわしく、二月中旬にはクロッカスや水仙が咲き始め、晩秋まで街中が鮮やかな花の色と香りに包まれる。

住宅街にはガーデニングの見本にしたいような家が立ち並び、五月中旬から六月上旬にかけて、市街のいたるところに立つ千本以上の街灯に、フラワー・バスケットが吊り下げられるという。

ただ街を歩くだけでも、花の美しさを楽しむことができる街なのだ。

響子が、最初にビクトリアの街に惹かれたのは、「ブッチャート・ガーデン」という世界的に有名な庭園を写した一冊の写真集を見たときだった。

手入れの行き届いた庭園に、溢れるように咲き誇る色鮮やかな花々……。

それは、まるで虹色の絵の具を使って、緑のキャンバス一面に自由自在な絵を描いたような美しさだった。

そのブッチャート・ガーデンは、ビクトリアのダウンタウンから北に二十一キロほど離れた郊外にあるという。

響子がビクトリアに着いたら、真っ先に尋ねてみたい場所だった。
ちなみに、響子の通うことになっているガーデニング・スクールも、このブッチャート・ガーデンのすぐ近くにあった。
ブッチャート・ガーデンは、ブッチャート一族が所有している私庭だ。
かつて、夫の経営していたセメント鉱山の採掘跡に花や低木を植えて、素晴らしい庭園に造り上げたのはジェニファー・ブッチャート夫人だ。
夫人がこの場所に初めて花を植えたのは、一九〇六年のこと。
今から百年近くも昔のことである。
そして現在も、ブッチャート一族は、夏になると多くのボランティアとともに庭園の管理を行なっているという。
響子は、ブッチャート・ガーデンの写真集を宝物のように大切にして、何度も何度も開いて見た。
嬉しいことがあった日はもちろん、哀しくてたまらないときにも、この写真集がどれほど響子の心を癒してくれたかわからない。
その憧れの庭園が、近づいている。
もう、すぐそばまで来ているのだと思うと、響子の心は弾んだ。
ただ心配だったのは、響子は知らぬ間に、この写真で見ただけの庭園を、心の中であまりにも理想化してしまっているかもしれないということだった。

実際に庭園を訪れてみると、それほどのことはないのかもしれない。
長い間、抱いてきたイメージが壊れてしまったら……。
そう思うと、庭園を訪れて自分の目で確かめるのが怖くなった。
だが、響子はビクトリアのバスディーポに到着すると、とりあえず観光案内所を訪れて、今夜、宿泊するホテルを決めたあと、とるものもとりあえずブッチャート・ガーデン行きのバスに乗り込んだ。
ビクトリアの観光スポットは、ほとんどがダウンタウンに集中している。
観光をしにやってきたつもりはないけれど、一度はビクトリアの街の見どころを巡ってみたいとは思っていた。
確か、ビクトリア出身の画家、エミリー・カーの生家があったはずだ。
彼女の作品は、バンクーバー美術館にも飾られているらしい。
けれども、観光ポイント巡りはしばし後回しだ。
心はすでにブッチャート・ガーデンに飛んでいた。
だが、ブッチャート・ガーデンに行く手前に、響子の通うことになっているガーデニング・スクールがあった。
少し迷ったが、先に一度スクールに立ち寄って、きちんと入学手続きを済ませておこうと思った響子は、スクールの近くの停留所でバスを降りた。
響子の通うガーデニング・スクールのある「パシフィック園芸センター」は、バス通

りから脇道にそれて少し歩いたところにあった。
小さな木のドアの向こうに、いくつもの花壇が続いているのが見えた。
そこは、想像をはるかに超える美しい場所だった。
ドアを押して園芸センターの中に入ると、緩やかに傾斜した坂道の両側に、美しい花畑が広がっていた。
その花畑の花を眺めているだけで、幸せな気持ちが胸にこみ上げてくる。
まったく予期していなかった驚きだった。
花を見て、こんな切ない、それでいて幸福な気持ちになったのは初めてだった。
なぜだか涙が出そうになって、響子は身動きすることもできず、その場に立ち尽くしてずっと遠くまで続いている花畑の風景を眺めていた。
すると、誰かが、背後からふいに声をかけた。
「ずいぶん熱心に見てるんだね」
はっとして振り返ると、背の高い外国人の若者が明るい笑顔を浮かべて立っていた。
「この花畑がそんなに気に入ったの？」
若者は屈託のない顔で尋ねた。
「ええ、とても素晴らしいわ！」
響子は正直に、その感想を口にした。
「花に、植えた人の魂がこもっているような気がする。花を見て、こんなふうに感じた

のは生まれて初めてよ」
響子の言葉に、若者はゆっくりと頷いた。
「ここは、このガーデニング・スクールでプロのガーデナーを目指している生徒たちが造った、デモンストレーション・ガーデンなんだよ」
「デモンストレーション・ガーデン……？」
響子は、鼻をすすり上げた。
「大丈夫？　泣いているの？」
若者は、驚いたように訊ねた。
響子は、涙を悟られまいとしたが無駄だった。
「花を見て涙が溢れてくるなんて、自分でも信じられない。だけどこの花畑、ほんとうに素敵ね。花に対する愛情が溢れているのを感じるわ」
「そうか。確かに、そうかもしれないね」
若者は、そう言ってにっこりと笑った。
日焼けした肌。
筋肉質のスリムな体には、無駄な脂肪がひとかけらもない。
肩幅ががっちりと広く、長い腕が半袖のシャツからすらりと伸びている。
そして瞳は、深いブルー。
響子は、その瞳を美しいと思った。

「僕はウィリアム・デイヴィス……、ビルって呼んでいいよ」
その若者が名前を名乗ったので、響子も自己紹介した。
「私は霧島響子、キョウコよ。昨日、日本からバンクーバーに来たばかりなの」
「キョウコか、いい名前だね。日本には確か、キョウトっていう古い街があるって聞いたことがあるけれど……」
そのビルの見当はずれな連想に、響子は思わず笑ってしまった。
「ええ、確かに京都は古い伝統のあるいい街よ。だけど、私の名前は京都のキョウではなくて、響くっていう意味なの」
響子は、ビルにそんなことを言っても理解できるかどうか疑問に感じながらも、とりあえず説明した。
「ふうん、日本の漢字って難しそうだね」
ビルは、楽しそうに笑った。
「ところで、君、ここに何か用があってきたの?」
「そうよ、ここのガーデニング・スクールに入学するの」
「へえ、それは大歓迎だよ!」
響子の言葉に、ビルは目を輝かせた。
「あなたも、ここの学生さんなの?」

響子が訊ねると、
「いや、違うよ。だけど、ここの学長と親戚なんだ」
と、ビルは言った。
「まあ、そうだったの」
（ということは、学長の甥っ子ということになるのかしら……）
ビルがなぜここにいて響子に話しかけてきたのか少し気になったけれど、とくに立ち入ったことを聞くつもりはなかった。
「ちょうどよかった。これから学長のところに会いに行くところだったんだ。センターまで案内してあげるよ」
ビルは気軽にそう言うと、先に立ってすたすたと歩き出した。
「……それは、どうもありがとう」
とりあえずお礼を言って、響子は小走りでビルのあとを追った。
坂道を上りきったところに、園芸センターの校舎らしき建物が建っていた。
正面玄関を入ると、事務局の窓口があったので、響子は書類を提出して入学確認の手続きを済ませた。
それからビルに連れられて、響子はその建物の三階にある学長室を訪れた。
「やあ、叔母さん、こんにちは！」
学長室のドアをノックして、ビルは明るい調子で言った。

「まあ、ビルじゃないの。元気そうね」
扉が開き、中から陽気そうな中年の女性が顔を出した。
（この人が、学長さんなのね……）
響子はその女性を見て、明るさのなかに上品さと威厳を持ち合わせたような風貌を、素敵だと思った。
「ご無沙汰してます」
「よく来てくれたわ。さあ、中におはいりなさい。姉さんは、変わりない？　ワイナリーのほうは順調なの？」
「ええ、忙しくしていますよ。これ、お土産です」
ビルは学長室に入って、入り口の近くの床に重そうな荷物をドンと置いた。
「新しくできたワインです。また、飲んで感想を聞かせてください」
「はいはい、いつもありがとう。今度はどんな仕上がりになっているか、楽しみだわ」
「今度のは、少し辛口の赤ワインです。なかなかの自信作なんですよ」
ビルは屈託のない笑みを浮かべた。
「ところで、そちらの可愛らしいお嬢さんは？」
ビルの後ろに立ってぼんやりと二人のやりとりを聞いていた響子は、突然、話が自分のことになって緊張した。
「あの、はじめまして、霧島響子といいます」

響子は慌てて挨拶して、ぺこりと頭を下げた。
「今、センターの入り口で出会ったんです」
と、ビルが口を挟んだ。
「花畑を夢中で眺めているところに行き合わせて、声をかけたんです。日本から来た、ここのガーデニング・スクールの新入生ですよ」
「まあ、そうなの。よくいらっしゃいましたね」
学長は、気さくな笑顔で握手を求めた。
「私はこの園芸センターの学長を務めているアン・メイザーです。よろしくね」
「はい、よろしくお願いします」
響子は、差し出されたアン学長の右手を握った。
「カナダには、いついらしたの?」
アン学長が訊ねた。
「昨日です」
と、響子が答えると、
「確か、あなたの入学は四月からの予定でしたっけね。それまで、まだ数日ありますね。ほんとうはスクールは二月に開講しているのだけど、キョウコはまずビクトリアの街をよく見ておくといいわ」
と、アンは言った。

「はい」
響子は学長の言葉に温かい心遣いを感じて、嬉しくなった。
「ブッチャート・ガーデンには、もう行きましたか？」
重ねて、アン学長が訊ねた。
「いいえ、ビクトリアには今朝、着いたばかりなんです」
「じゃあ、さっそく行ってみるといいわ。ここの卒業生たちも、大勢あの庭園でボランティアとして働いているのよ」
アン学長がそういうと、ビルが横から口を出した。
「じゃあ、僕が案内してあげるよ」
「え？」
響子は、ビルの申し出に驚いた。
（どうして？　今、知り合ったばかりなのに……）
響子は、隣に立っているビルの顔をまじまじと見つめた。
するとビルはにっこりと笑って、その青い澄んだ瞳で響子を見つめ返した。
響子が、どう返事をしていいかわからずにいると、
「そう、ビル、じゃあ、そうしてあげてちょうだい。あの庭園の花や木には、ブッチャート夫妻の遺志でネームプレートがいっさい付いていないから、説明してあげる人間がいたほうがいいわ」

とアン学長が、こともなげにそう言った。
カナダの人はとてもフレンドリーだと聞いていたけれど、皆、こんなふうに初対面の人間に対して親切なのだろうか……？
響子は、変に警戒心の強い自分が、なんだかばかばかしく思えてきた。
だから、せっかくのビルの申し出に甘えることにした。
（一人でゆっくり花を見ようと思っていたけれど、誰かがいっしょにいてくれるのもいいかもしれないわ）
ビルを見ていると、そんなふうに思えた。
学長室を出ると、響子は園芸センターの入り口に停めてあったビルのシトロエンの助手席に乗って、ブッチャート・ガーデンを目指した。
いよいよ憧れの庭園をこの目で見るのだ。
そう思うと、響子の胸はいやおうなしに高鳴った。

果たして、ブッチャート・ガーデンは写真集で見た光景そのままに、息を呑むほど美しい庭園だった。
二十ヘクタールに及ぶ広大な庭園のどの花壇にも、色とりどりの春の花がほぼ満開状態に咲いている。
緑色の濃い芝生、植木、花の色鮮やかさ……。

（まるで緑のキャンバスに、虹色の絵の具で絵を描いたよう……）
想像していたとおりだった。
なかでも、見晴台から見下ろすサンクン・ガーデンの眺めが素晴らしい。
庭園の入り口を入って右手にベゴニアの棚を見ながら進んでいくと、約十五メートルほど下方にサンクン・ガーデンの見事な景色が広がる。
セメント工場用の石灰岩を掘り尽くした跡の窪地を、「サンクン・ガーデン（窪庭）」と名づけたのは、ブッチャート夫人だ。
庭園の奥には、セメント工場の名残の大きな煙突も見える。
採掘場の絶壁が自然のままに残されていて、そこにはツタが生い茂っていた。
サンクン・ガーデンの先には、ロス噴水がある。
ブッチャート・ガーデンの創設三十周年を記念して造られた噴水だ。
毎年、六月中旬から九月中旬まで、日没後にはこの噴水に色とりどりの照明が施され、噴き上げる水しぶきを彩るのだという。
ロス噴水から先には、ポプラの並木道が続く。
その右手の芝生の広場で、どこかの楽団がライブ演奏を行なっていた。
芝生の丘を下ると、ダリアの咲く小道へと続く。
そして、庭園の中央にあるバラ園へと辿り着く……。
残念ながら、バラの季節にはまだ少し早過ぎて、その優雅で美しい花を見ることはで

きなかった。

だが、ここにも六月の下旬になれば、さまざまな種類のバラの花がいっせいに咲き誇り、赤、ピンク、白、黄色、といった美しい色が溢れ出し、ここから流れ出した甘い香りが庭園の中に漂うのだろう。

アン学長が言ったとおり、庭園内の花や木にはネームプレートがいっさい付けられていない。

花の名前を知りたいときは、園内の「植物識別センター」に問い合わせればわかるようになっている。

ところが、このバラ園のバラに限っては、それぞれの品種名や原産国などが記されたプレートが付けられていた。

バラ園の奥にも噴水があって、その先の朱色の鳥居をくぐると日本庭園がある。

一九〇六年、ブッチャート・ガーデン創設の年に、ブッチャート夫人が日本の庭師、岸田イサブロウ氏に援助を受けて造り上げたものだ。

緑の濃い日本庭園は、少々中華風の趣を呈していた。

日本庭園をぐるりと巡ると、星の池に出る。

星の池の横には、左右対称のデザインが特徴的なイタリア庭園が広がっている。

そして、これで遊歩道は庭園内を一周して入り口へと戻る。

夢中で見て回っていると、二時間余りが経過していた。

遊歩道を歩ききって入り口に戻ってきたところで、響子は可愛らしい外観をした建物を発見して言った。
「まあ、こんなところに、レストランやギフトショップがあるのね」
ショップには、花の種やガーデングッズをはじめ、書籍、陶磁器や民芸品、そしてTシャツなどが揃っていた。
「ねえ、何か食べないか？　僕、お腹がすいちゃったよ」
ビルがブルー・ポピー・レストランと看板に書かれた、カフェテリア式のファミリーレストランの前に立って言った。
「そうね。じゃあ、ここで少し休憩しましょうか。ビル、いろいろ案内してくれて、どうもありがとう」
響子も同意し、そのレストランに入った。
「どうだい、ブッチャート・ガーデンの感想は？」
互いにショーケースから好きな料理を選び、席に着くとビルは訊ねた。
響子はそれに応えて、
「私、日本にいたときからこのブッチャート・ガーデンの写真を見たことは何度もあって、ずっと憧れていたんだけれど、今日とうとう、ここにやってきて自分の足で庭園の中を歩き、この目でその風景を確かめることができて最高の気分よ……」
と、言った。

「よかったね」
響子の言葉を聞いて、ビルは自分のことのように嬉しそうな顔をした。
「だけど、園内のあれだけの花を維持し続けていくのって、ものすごく大変なことでしょうね」
「ああ、アン叔母さんも言ってたけど、園芸センターの生徒たちが大勢ここでボランティアで働いているんだ。そうしたガーデナーたちの心意気で、この庭園の美しさが保たれているんだよ」
「そうなのね。ビクトリアの人々は、ほんとうに、心底、花作りが好きで、花を愛でる心を持っているんだなあって思うわ」
響子は、心から感心してそう言った。
「ところで、キョウコは、アン叔母さんのガーデニング・スクールの卒業生たちは、卒業後の二年間で、七十時間以上の園芸ボランティアを行なわなければならないって、知ってるかい？」
「まあ！　ほんとうなの？」
初耳だった。
驚いて響子が訊き返すと、ビルは頷いた。
そして、真剣な面持ちで言葉を継いだ。
「ほんとうだよ。ビクトリアには、たくさんのプロのガーデナーたちがいる。造園の専

門知識を学んでマスター・ガーデナーになろうと思ったら、そのぐらいは当然さ。キョウコには、その覚悟はあるのかな」

いつの間にかビルの顔から笑顔が消えて、テーブルを挟んだ席から、真顔でまっすぐに響子を見つめていた。

響子は、一瞬答えに詰まってしまった。

（さあ、どうだろう？　私には、そんな覚悟があるのかしら……）

でも、花を愛する心なら、誰にも負けない自信があった。

そして少し考えてから、きっぱりと宣言するように言った。

「大丈夫よ。やれるわよ、私。一人前のガーデナーになるためだったら、どんなことだってできる。だって、そのためにこの国に来たんですもの」

それを聞いて、ビルが嬉しそうに笑った。

その深いブルーの瞳が、カフェテリアの窓から差し込む太陽の光を反射して、きらきらと輝いた。

「そう、よし、そうこなくっちゃね。キョウコは見かけによらず意志が強そうだから、きっとやり遂げられるさ」

「そ、そうかしら……？」

響子は、ビルの言葉に少し面食らって言った。

「うん、きっと、大丈夫さ！」

「それは、どうもありがとう……」
(それにしても、私の意志が強そうだなんて、どうして、そんなふうに思ったのかしら……?)
響子はビルに聞いてみようとしたが、なんとなく聞きそびれてしまった。
「ところで、ビル。さっき学長とワインの話をしていたけど、あなたはワイナリーを経営しているの?」
響子は、話題を変えた。
ビルのことをもっと知りたいと思った。
「ああ、そうなんだ」
ビルは身を乗り出し、話に乗ってきた。
「カナダのワインって、あまり聞かないけれど……」
「そう? 日本じゃ、まだまだ知名度が低いかもしれないな」
「そうね。ワインというと、フランスとかヨーロッパが主流で、ときどきチリのワインなんかも見かけるけれど……」
響子は正直に言った。
「カナダのワインも、最近はずいぶん評価が上がっているんだよ」
ビルは、ムキになったように言った。

どうやらビルは、ワインのことになると夢中になってしまうようだ。
さっきまでの落ち着いた雰囲気が影をひそめ、少し子供っぽい、やんちゃ坊主のような表情を見せている。
「そうだったの」
響子は相槌を打つ。
「ああ。国際的な基準からするとまだまだだけど、最近じゃコンテストで金賞を獲ったりもしているんだ」
「そういえば、カナダのアイスワインというのを聞いたことがあるわ」
ふと思い出して、響子は言った。
純一郎といっしょに行ったレストランで、一度、飲んだことがあったのだ。
フルーティな辛口の白ワインだった。
「うん。確かにね。カナダのワインとして有名なのは、今のところオンタリオ州のアイスワインなんだ。だけどね、僕の住んでいるオカナガン地方のワインも、負けちゃいないよ」
「オカナガン？」
「そう、バンクーバーから東に四百キロほど行ったところにあってね、果樹とワイナリーで知られる地方だよ」
「へえ」

「春と秋にはワイン・フェスティバルが開かれるんだけど、最近のワインブームのおかげで、観光客が大勢やってくる」
「ワイン・フェスティバルって？」
響子は興味をそそられて訊ねた。
「ワインの試飲大会をしたり、ホテルでイベントが行なわれたりするんだ」
ビルは言った。
「ねえ、キョウコ。今度のフェスティバル、ぜひ見においでよ。ほんとうは秋のフェスティバルのほうが賑やかなんだけれど、もうすぐ春のフェスティバルが、今年は五月二日から開催される予定だから……」
「ほんとに？」
響子は、アルコールはそれほど飲めるほうではなかったが、美味しいワインは大好きだった。
「今から一カ月ちょっと先だけど、僕が園芸センターまで迎えにいくよ。キョウコもきっと、センターでの暮らしに少し慣れたころだろう。アン叔母さんに言って、二、三日、休暇をもらうといいよ」
ビルは、どんどん話を進めていった。
「とっても、楽しみだわ」
響子もすっかりビルのペースに乗せられて、にっこりと微笑んだ。

ビルとこんなふうにすっかり打ち解けて話している自分が、なんだか不思議でしかたなかった。
ほんの数時間前に、出会ったばかりなのに……。
響子は、普段は少々人見知りする傾向があった。
初対面の人間とこんなふうにリラックスして、自然体でいっしょに過ごせるなんて、初めてのことだった。
（それも、相手は外国の男性……）
ビルが特別なのか、カナダの人は、皆、こんなにフレンドリーで気さくな人ばかりなのか、響子には判断がつきかねた。
けれど、それはどちらでもいいことだ。
とりあえず、今日は楽しかった。
「ビクトリアって、ほんとうに素敵なところね。私、思い切って来てよかったわ」
響子はしみじみした気持ちでそう言った。
「そうだろ、僕もこの街が大好きなんだ。カナダ中の人間がこの街に憧れているかもしれないな。なにしろ、その昔、この街が開かれたころは、『エデンの園』って呼ばれていたぐらいなんだよ」
「アダムとイブの楽園……」
「ここに来ると、穏やかで清々しい気持ちになれる。いつもそうだ」

ビルの言葉に、響子は強く頷いた。
（ほんとうに、ここは楽園のようだわ……）
カフェテラスの窓からさっき通ってきたイタリア庭園のほうを眺めやって、響子はうっとりとした気持ちになった。
そして、ティーポットに残っていたお茶をカップに注ぎ足しながら、
「このハーブティーも、とっても美味しいわ」
と、呟くように言った。
すると、ビルが不思議そうな顔で、
「ハーブティーを飲む習慣って、日本にもあるの？」
と、訊ねた。
「そうねえ、誰でも飲むというわけじゃないかもしれないけれど、日本でも数年前にブームになって以来、だんだん生活の中に溶け込んできているわ」
「へえ、そうなんだ」
「私、ガーデニングの仕事をしていていちばん興味を持ったのが、このハーブなのよ」
意外そうな顔をしているビルに、響子は自分の気持ちを整理するように、言葉を選びながら話し始めた。
「日本でもここ数年、ガーデニングは大人気なの。庭付きの一戸建てに住んでいる人はもちろん、マンションのベランダや、狭いスペースでも花作りをしようとする人々が増

えてきてるわ。だけど、何かが違うような気がするの」
「何かって？」
ビルが訊ねた。
「どう言っていいのかよくわからないのだけど、とにかく日本らしくないのよ。欧米のガーデニングをそのまま真似しているだけというか……。日本のオリジナルのものになっていないの」
「ふ～む……」
ビルは腕を組んで、考え込む様子を見せた。
「特に、ハーブ……。日本の女性は、ガーデニングというとお決まりのようにハーブを栽培したがるの。実際に日本の女性向けのファッション雑誌なんかでも、よくハーブ栽培が特集されたりしているわ。そして、確かにハーブ・ガーデンの人気は根強いものがあるんだけど、栽培したハーブを、ちゃんと生活に取り入れている人がどれだけいるかは疑問だと思うの」
「つまり、日本のガーデニングはただのファッションに過ぎないってことかな……？」
と、ビルが言った。
「そうね、そうなんだと思う。単なるブーム、一時的な流行に過ぎないのかもしれないって気がするわ」
「そうか。だけど、ブームがしっかりと根付いて育っていくってこともあるよ」

ビルが反論した。

「そうかしら。だけど、欧米人にとってハーブって、生活の中で欠かすことのできないものになっているけれど、日本では別になくたって少しも困らないものよ」

と、響子は言った。

「ハーブの活用法って、料理に使ったり、薬として用いたり、香りを楽しんだり……、こんなふうにお茶にしたりって、いろいろあるけれど、どれも日本の風土、文化とは調和しないような気がするの。食事の内容も、日常の生活様式も違うんですもん。それを無理に取り入れようとするのって、ただ、日本の欧米化をますます進めているだけのような気がするのよ」

「なるほどね……」

静かに聞いていたビルは、納得したように深々と頷いた。

「キョウコの言ってることは、なんとなくわかるような気がするよ。だけど、キョウコはハーブに魅力を感じているんだろう？　ハーブについて、もっと勉強したいと思っている……。そうなんだろう？」

「え、ええ……」

確かに、そうだった。

響子は、さまざまなハーブの効用やその利用法の奥の深さに魅了され、もっと詳しく学びたいと思っていた。

（だけど、それはいったい何のためなんだろう？）
日本の生活の中に、もっとハーブを取り入れていくにはどうしたらいいか探りたいと考えているからなのだろうか。
それとも、ただの自己満足？
「例えば、僕の場合だって、同じことが言えるかもしれないよ」
と、ビルが言った。
「つまり、ヨーロッパには最高のワインを作ることができる国がある。たとえば、フランスだね。だけど、カナダではワイン作りに関しては、気候も、伝統も、どうあがいたって太刀打ちできない。悔しいけどね……」
「……」
響子は、無言のまま頷いた。
「だけど、僕は作りたいんだ。世界一のワインをね！」
「ええ」
「だから、それがすべての答えさ」
ビルは、きっぱりと言った。
「だから、キョウコもハーブについてしっかりと学べばいい」
響子は、その自信に溢れた力強い言葉に圧倒されながら、ビルの言おうとしていることについて考えた。

「自分のしたいようにすればいいということ……？」
と、響子は訊いた。
「もちろん、それもあるさ」
と、ビルは言った。

「ねえ、キョウコは今夜、どこに泊まるの？」
唐突に、ビルが訊いた。
「え？　ダウンタウンのエンプレス・ホテルだけれど……」
響子は、観光案内所で紹介してもらったホテルの名前を告げた。
「それがどうかしたの？」
（どうして、急にホテルのことなんて訊くのかしら……）
響子は少し戸惑いを感じて、ビルに問い返した。
「そう、ずいぶん高級なホテルを予約したんだね。そこも悪くはないけれど、どう、これから僕が泊まろうと思っている宿にいっしょに行かない？」
「え？」
どういう意味だろう？
出会ったばかりだというのに、同じホテルに泊まろうなんて……。
ベッドに誘おうとしているのだろうか？

（まさかね……）
さっきまで、話していて心が通じ合っているように感じていたのは、いったい何だったんだろう。
（男って、結局、そういうものなのかしら……）
響子の顔に警戒の表情を読み取ったのか、ビルは慌てて言い直した。
「ちょっと待って。もしかして、誤解したんじゃないか？　言い方がまずかったかな」
「ご、誤解って……」
響子はビルに心を見透かされたような気がして、反対にどぎまぎしてしまった。
「安心してよ。僕には、変な下心なんかないよ。いくらキョウコが魅力的な女の子だからって、そんなつもりはないから……」
「じゃ、じゃあ、どういう……」
響子は、恥ずかしさで顔がかっと火照るのを感じた。
「スーク・ハーバー・ハウスって聞いたことないかな？」
ビルは、泊まろうとしている宿の名を口にした。
「さあ……」
聞いたことのない名前だった。
響子が、ビクトリアに来たばかりだと知っているくせに、わざわざ訊くということは、それほど有名なところなのだろうか？

「とにかく、行けばきっと気に入ると思うんだ」
と、ビルは言った。
「そうなの……」
なんだか、ビルの澄んだ瞳を見ていると、響子の警戒心は少しずつ溶けていってしまうような気がする。
「僕を信じて……」
「わかったわ」
響子は、ビルの言う宿に泊まることに決めた。
部屋は別々に取ると言ってくれたし、ビルは、どう見ても突然、襲いかかってくるようなタイプの人間には見えなかった。
それに響子も、今さらそんなことに脅えるような小娘でもない。
なるようになればいい……。
そんな気持ちもどこかにあった。

2

二人はブッチャート・ガーデンを出てから、ビルのシトロエンでダウンタウンに戻り、そこから西に折れてスーク入り江に向かった。

そして、ビクトリアのダウンタウンから四十五分ほど走ると、海岸沿いに目指す建物が見えてきた。
「ほら、あれがスーク・ハーバー・ハウスだ」
クリーム色の壁をした三階建ての建物が、二棟並んでいる。
こぢんまりした宿だった。
ハウスの前の広い土地が、畑になっているようだ。
「わあ、すごいわ。これ、みんなハーブなの？」
車から降りた響子は、ハウスの前庭に広がるハーブ・ガーデンを見て歓声を上げた。
「そうなんだよ。これを見せたくて、キョウコをここに連れてきたのさ」
「そうだったの……」
響子は感激して、ハーブ・ガーデンの中に入っていった。
「知らないハーブがたくさんあるわ……」
響子が、ひとつひとつのハーブに手を触れてその香りを確かめていると、ガーデンの真ん中あたりにかがんで何やら作業をしていた老人が、むっくりと立ち上がった。
「おや、ビルじゃないか！」
老人はちらりと響子に目をやって、その後ろに立っていたビルに気さくな調子で声をかけた。
「親爺さん、久しぶり」

「まったくだ。冬の間は、一度も顔を見せなかったな」
「すみません」
老人の遠慮のない言葉に、ビルは頭を掻いた。
そして、響子のほうに向き直って、
「この人は、このハーブ・ガーデンの専任ガーデナーなんだ」
と言った。
「クック・バイロンさんだよ」
クック老人は、大きな目で睨むように、ぎょろりと響子を見た。
「ガールフレンド連れとは、珍しいね」
「こんにちは」
響子はおずおずと挨拶をした。
「ああ、よろしくな」
クック老人は握手のあと、
「さてと、ちょうどいいところに来てくれた。手が足りなくて困っていたんだ。さあさあ、仕事はたっぷりあるぞ。そっちのお嬢さんには、今、植えたハーブに水を撒いてもらおうかな」
「は？」
響子が面食らってきょとんとしていると、

「おや、そこの看板が目に入らないかい？」
と、クック老人は庭の一点を指差した。
言われて見ると、ビニールハウスの脇に小さな白い看板が立っている。

『ボランティア大歓迎！
ただし、人づかい荒らし
ガーデン長、クック・バイロン』

響子は、看板を読んで思わず吹き出し、あははと声を出して笑ってしまった。
ビルは黙ったまま、ことの成り行きを見守っている。
「わかりましたわ、クック・ガーデン長さん。それで、お水はどうやって撒けばいいのかしら……？」
「おや、ありがたいねえ。このハーブ・ガーデンは、あんたのような話のわかる客人の労働力によって成り立っておるんじゃ。わしも、もう年だからな」
クック老人は、わっははぁと陽気に笑った。
クック老人に言われるままにハーブ・ガーデンでの作業に没頭し、二人が宿の玄関をくぐったのはもうすっかり薄暗くなってからだった。

「お世話になります！」
ビルが挨拶すると、奥から女主人が出てきて、にこやかな笑顔で迎えてくれた。
そして、ビルも響子も、洋服の袖口やらズボンの裾を汚したり、濡らしたりしているのを見つけて、
「まあまあ、二人とも泥だらけじゃないの。またクックさんにこき使われたのね。まったく、しょうがないんだから……」
と、顔をしかめた。
でも、目は笑ったままだ。
「いいんですよ、好きでやってるんだから」
ビルも笑いながら応えている。
女主人は、響子のほうを向いて、
「こちらのお嬢さんが、さっき連絡いただいたキリシマ・キョウコさんね」
と、微笑みかけた。
「私は、このスーク・ハーバー・ハウスのオーナーのフレデリーカです。今日は、来てくださって嬉しいわ。さっきビルから電話であなたのイメージをうかがって、ぴったりのお部屋を用意しておきましたよ。気に入っていただけるかしら……」
女主人のフレデリーカは、誰でも好感を持つに違いない人懐っこい笑顔で、響子に話しかけた。

思わず引き込まれてしまうような、魅力的な笑顔だった。
もてなし上手な人というのは、こういう人のことをいうのだろう。
「大丈夫、この宿を気に入らない人間がいたら、そいつにはきっと赤い血は流れていないに違いないさ」
「あらあら、嬉しいことを言ってくださるのね」
フレデリーカは、またにっこり笑った。
「さあ、それじゃあ、お部屋のほうにご案内しましょうね」
「よろしくお願いします」
響子は、心を込めて挨拶した。
「ここには客室が二十八室あるのだけれど、一つ一つの部屋の内装がすべて違っているんだ。どの部屋も、このフレデリーカの手でデザインされたものなんだよ。例えばどんな部屋があるかというと、僕が、今夜、泊まることになっている部屋は、ハーブ・ガーデン・ルーム……、そして……」
「まあ、そうなの！」
「キョウコさんには、マーメイド・ルームを用意しておきましたよ」
フレデリーカが、口を挟んだ。
「確か、お風呂がジャグジーになっている部屋だね。まさしく、キョウコにぴったりだよ。オーナーは、さすがだね」

フレデリーカはその言葉に嬉しそうな様子で、二人の先に立って建物の三階に上っていった。
ビルのハーブ・ガーデン・ルームは三階の東の端にあり、響子の部屋はそのひとつ置いて隣にあった。
「わあ……！」
ドアを開けて、一歩、部屋に足を踏み入れた響子は思わず歓声を上げた。
南側全面が窓になっていて、スーク入り江が遠くまで見渡せる。
水平線が丸くカーブしているのまでわかるぐらい……。
「気に入った？」
ビルが、訊くまでもないという顔で訊ねた。
「ええ、ものすごく……」
響子は、素直にそう言った。
「ついでに、僕の部屋も覗いてみない？」
「え、ええ」

ビルの部屋は、予想したとおりハーブの香りが漂っていた。
「ほら。この枕の中には、ラベンダーが詰まっているんだよ」
ビルが、ベッドからひょいと枕を持ち上げて、響子に差し出した。

「ほんとうだわ。とってもいい匂いがする」
ハーブには、心身をリラックスさせる効果や、反対に気持ちを高揚させる効果のある成分などが含まれている。
「なんだかこうしてこの部屋にいるだけで、とってもリラックスした気持ちになってくるわ」
響子は枕のラベンダーの香りのせいか、眠気を感じて小さくあくびをした。
「リラックスしすぎだね……」
ビルが笑った。
「この部屋が、僕のいちばんのお気に入りなんだ」
「そうだったの」
響子は、ビルがどうしてこの宿に自分を連れてこようと思ったのか、なんとなくわかった気がした。
「こんな素晴らしい宿があるなんて……」
「いや、感謝するのはまだ早いよ。それは、ここの料理を食べてからにしてほしいな。なにしろ、北米でベストテンにランクインする美味しさなんだからね」
「まあ、ほんとうなの？」
響子は驚いて言った。
「もちろん！　ねえ、フレデリーカさん」

ビルは、部屋の入り口に立っていたフレデリーカに同意を求めた。
「ええ、まあ。……といっても、自家製の野菜やハーブ、それにエディブル・フラワーと、スーク入り江で獲れたばかりの新鮮な魚介を使って、ただただ自然食を心がけているだけなんですよ」
フレデリーカは、少し照れたように言った。
「それに、盛り付けのセンスが最高なんだな」
「そんなに褒めてくださって……。コックたちに伝えておきますね。これは、一品、何か増やさないといけないわね」
少しおどけて、フレデリーカは笑った。
響子は、その温かい笑顔をほんとうに素敵だと思った。
心の底から人をもてなすことが好きでなければ、こんな宿は作れないだろう。
「それじゃあ、すこし寛(くつろ)がれたら、レストランのほうにいらしてくださいな」
フレデリーカはそう言って、階下へおりていった。

ビルが絶賛したとおり、ディナーは素晴らしい料理の数々だった。
「美味しい！　私、今までこんなに美味しいもの、食べたことないわ！」
メニューは、さっきビルの部屋でフレデリーカが言ったとおり、新鮮な野菜や魚介を使ったシンプルなものだった。

でも、その味は最高だった。
「こんな料理は、世界中探したって食べられないと思うわ」
響子が感激して言うと、
「キョウコは、ハーブが日本の食文化には合わないんじゃないかって言ってたけれど、そういうことにはこだわらないで、洋食だとか、日本食だとかいう概念の枠を取り払ってしまうことってできると思うよ。単純に美味しい料理を美味しいと思えることが、大切なんじゃないかな」
と、ビルが言った。
「ほんとだわ。ビル、あなたってすごい人ね」
響子は、ビルを尊敬の眼差しで見つめた。
「そんなふうに言われると、なんだか照れてしまうよ」
ビルは少し赤くなった。
「キョウコにはこっそり打ち明けるけど、僕の夢のひとつはね、いつかすごいワインをつくって、この宿にそのワインを置いてもらうことなんだ」
「まあ！　そうなの……」
ビルは耳まで赤くなって、しーっと唇に指を当てた。
「まだまだ、そんなことを言う自信はないんだけどね……」
（可愛い人だわ……）

響子は、ビルに対する愛情が胸の奥のほうから湧き出してくるのを感じた。
（今日、会ったばかりだというのに、私、どうしちゃったのかしら……）
響子は、神崎純一郎への断ち切れない思いを引きずって、苦しんでいる。
それなのに、出会ったばかりの男性にこんな気持ちを抱くなんて、どうかしている。
確かに、ビルは素敵な人だ。
だが、響子は、もう恋愛はこりごりという心境だった。
誰かを好きになっても、また、あんなに苦しい思いをすることになるだけだと考えると、もう耐えられそうになかった。
相手を深く愛しすぎて、その愛の深さの分だけ傷つき、疲れ果てていく。愛に縛られて、身動きができなくなってしまう。
自分を見失ってしまい、息もできないぐらい切なくて、つらい毎日だった。
何気ない言葉に傷ついたり、傷つけたり……。
そして、最後に訪れるのは破局なのだ。
愛には寿命があるのかもしれない。
その寿命は短くて、初めはたとえ相手をどんなに愛していても、いつかその愛は醒めてしまうのだ。
二人でいても沈黙が続き、相手の嫌なところが目に付くようになっていく。
そして、かつて自分が、その相手をどんなふうに好きだったのかさえ思い出せなくな

っていく。
挙げ句の果てには、相手を恨んだり、憎んだりしてしまうことさえある。
恋愛なんて、楽しいと思えるのは、それが始まってほんのしばらくの短い間だけだ。
もしかすると、今の響子は、ビルに好意以上のものを感じ始めているのかもしれない。
だが、もしそうだとしても、ここでしっかりブレーキをかけなくちゃ……。
恋愛感情にのめり込んではいけない。
響子は自分がカナダに来た理由を、しっかりと心に思い起こした。

「どうしたの？　キョウコ、なんだか険しい顔をしてるよ」
ふいにビルの声が聞こえた。
屈託のない声に、響子は現実に引き戻され、
「いいえ、何でもないわ。ちょっと考えごとしちゃったみたい」
と、慌てて言った。
純一郎のことを思い出すと、どうしても気持ちが沈む。
ふっと、まわりのことが見えなくなってしまう。
ぼんやりと考え込んでしまうのだ。
「日本のことでも思い出していたのかな？」
ビルの何気ない言葉に、響子は一瞬、どきりとした。

「うーん、まあ、そんなところかな……」
響子は、曖昧に誤魔化した。
「ところで、キョウコはビクトリアに住む場所は決まってるの？」
ビルが話題を変えた。
「いいえ、まだなの。園芸センターの近くで、レンタルハウスを見つけようと思っているんだけれど……」
住む場所については、こちらに来てから適当なところを探せばいいと思って、まだ何も具体的に考えていなかった。
すると、ビルが思いがけないことを言い出した。
「じゃあ、センターの宿泊施設の中に僕専用の部屋がひとつあるんだけど、キョウコ、そこに住むといいよ」
「まあ、ほんとなの、ビル！」
ビルの提案に、響子は驚いた。
「うん」
ビルは、たいしたことじゃないというように、気軽に頷いた。
響子は、果たしてその申し出を受け入れていいものかどうか判断ができずに、困惑して訊ねた。

「ねえ、ビル。どうして会ったばかりなのに、そんなに私に親切にしてくれるの？」
すると、ビルが言った。
「さあ……、僕にもよくわからないんだけど、なんだか、会った瞬間から、僕はキョウコにすごく魅力を感じているみたいなんだ」
「……」
「一目惚れっていうやつかもしれないな」
ビルが冗談っぽく笑って、片目をつぶってウインクしてみせた。
響子はビルの言葉に、一瞬、体の奥がカッと熱くなるのを感じた。
（どうしよう……。私、このままじゃ、また……）
ビルに恋してしまう……。
だめよ、もう恋愛はしないって決めたんだから……。
響子は、ビルに自分の心の中の葛藤を悟られたくなくて、黙ったままでいた。

3

翌朝、宿を出発する前に、響子とビルはもう一度ハーブ・ガーデンを訪れ、少しだけクック老人の仕事を手伝った。
「昨夜のハーブを使った料理、とっても美味しかったです」

響子は、このハーブ・ガーデンのハーブの素晴らしさを称賛した。
クック老人はそれを聞くと、作業で汚れた泥だらけの手で嬉しそうに響子の両手を握りしめて、
「そうかい、そうかい。じゃあ、またおいで。なんなら、ここで雇ってやってもいいよ」
と、上機嫌に言った。
「ほんとに?」
「ああ、あんたはなかなか筋がよさそうだからな」
クック老人はまんざら冗談でもなさそうにそう言って、それが癖であるかのように片目をつぶった。
「私、ガーデナーとして、生活に密着した庭造りがしたかったんです。ここに来て、それがよくわかったの。すごく充実した気持ちになれた……」
と響子は言って、クック老人の手を握り返した。
「そりゃあ、よかった。しっかりやんなさい」
とクック老人はエールを送ってくれた。
「ありがとう」
響子は、もう一度クック老人の手を強く握り返しながら、お礼を言った。
まだ数日間、ここに滞在していたい気持ちだった。
「それじゃあ、また……」

名残惜しい気持ちを残して、響子とビルはスーク・ハーバー・ハウスを後にした。
昨日来た道を逆に辿ってダウンタウンに戻ってくると、
「キョウコ、せっかくだから、ビクトリアの街を少し案内してあげるよ」
と、ビルが言った。
なんとなく、このまま園芸センターに戻るのは淋しいと思い始めていたところだった。
その気持ちに従って、響子は意地を張らずに、素直にビルの申し出を受け入れることにした。
いつの間にか、響子はすっかりビルに打ち解けて、警戒心を解いてしまっている。
昨日、会ったばかりなのに、ずっと知り合いだったような気がする。
ビルといると、どうしてこんなにリラックスできるのだろう。
いったいこのビルという人は、響子にとってどんな意味を持つのだろう。
そんなことを考え出すと、やはり響子は恐れに似た感情に襲われてしまう。
誰かを心の奥深くに棲みつかせてしまうのは、もうこりごりだ。
その人に縛られて、他のことがおろそかになってしまう。
響子は、その苦しさをイヤというほど味わったのだ。
そして、ここに逃げ出してきたばかりなのだ。
その傷跡もまだ癒えていないというのに……。

（もう、傷つきたくない……）
しかし、響子は、会った瞬間から、ビルに心を捉えられてしまった。
そして、どんどん響子の心の中に入ってくる。
屈託のない笑顔、理知的で、思慮深い話し方……客観的にみても、ビルは魅力的な青年だと思う。好きにならないほうがおかしいぐらいだ。
響子は今、恋をするにはあまりにも疲れ果てていた。
だが、感情は理屈では割り切れるものではない。
ビルの魅力に抗しきれなくなるのは、時間の問題かもしれない。
響子は漠然と、そう思った。

「ビクトリアの観光名所は、だいたい、インナーハーバー周辺に集中しているんだ」
ビルは、地図を取り出して、いくつかのポイントを挙げた。
「州議事堂、
ロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館、
エミリー・カーの生家、
ビーコン・ヒルズ・パーク、
クレイダーロック城。
それとも、昨日キョウコが泊まるはずだった、エンプレス・ホテル前から遊覧船が出

ているんだけど、それに乗ってハーバーを一周するっていうのもいいかな……。いや、待てよ……」

ビルは地図を見ながら、予定を立てている。

「一日で全部回るのはとても無理だけど、また機会があるだろうし、ねえ、キョウコは、まずどこに行ってみたい？」

「そうね……」

車の助手席から運転席に座っているビルのほうに身を乗り出して、地図を覗き込もうとした拍子に、響子の頭がビルの頭にゴツンとぶつかった。

「イテッ……」

「あ、ごめんなさい！」

響子が謝りながら頭を引っ込めてぱっと顔を上げると、ちょうど目の前にビルの唇があった。

ドキン！　と、その瞬間、響子の心臓が大きな音を立てた。

自分の胸の鼓動が、はっきりと聞こえる。

赤く、厚い唇……だった。

響子は慌てて体勢を立て直し、呼吸を整えた。

「キョウコ、意外と石頭なんだな……」

ビルはほんとうに痛そうな様子で手のひらを頭のぶつかったところに当て、ゴシゴシ

と擦っている。
（やだ、私ったら、一人で何を意識しているのかしら……）
しかし、ビルの唇は、響子の脳裏にはっきりと焼きついてしまった。瞬きをするたびに、その赤い残像が見えるのだ。
（どうしよう……）
まだ、胸がドキドキしている。
「さてと、どうしようか？」
ビルが気を取り直して、再び訊ねた。
響子は、ビルから地図を借りて大きく広げ、すっぽりと顔を隠した。
そして、しばらくたってから、
「私、エミリー・カーの生家に行ってみたいわ。それから、花の咲いている公園も見てみたい……」
と、内心の動揺を悟られないように、平静を装って言った。
「じゃあ、そうしよう！　ビーコン・ヒルズ・パークがエミリー・カーの生家のすぐ近くにあるよ。今日もとってもいい天気だから、お昼はそこで日向ぼっこしながらサンドイッチでも食べようか！」
ビルが陽気に言った。
「賛成！」

エミリー・カーの生家は、ダウンタウンをまっすぐ南に下ったところにあった。
薄いクリーム色の外壁をしたビクトリア様式の二階建ての木造の洋館は、古いながらも優雅で、英国の格式を感じさせる。
洋館の前に広がる庭もイギリスの庭園風で、よく手入れが行き届いた花壇には可憐な春の花が咲いていた。
一階には、家族が揃って朝食を取ったという青い壁紙のダイニングルームと、英国式の暖炉のある書斎、古いピアノの置かれたリビングルームがある。
そして二階にはアトリエ、それからエミリーが生まれた部屋があり、そこにはエミリーが生涯愛用し続けたというベッドが置かれている。
こうした内装は、現在もほとんどが当時のままに残されているらしい。
イギリスから移住者としてやってきたカー一家は、その当時としてはイギリスの上流階級に属していた。
彼らは、母国イギリスを忘れることのないようにと、家中をすべてビクトリア王朝時代の家具や調度品で埋め尽くした。
だが、娘のエミリー・カーは、イギリス人ではなくカナダを愛し、カナダ人としての自覚をしっかりと持つように育てられたという。
その幸福を絵に描いたような家の内装を見ていると、エミリーの少女時代が豊かで満

ち足りたものであったことが想像できる。
「ねえ、見て！　この二階に続く階段の壁、大理石なのかなと思ったら、壁紙が張ってあるのよ。本物そっくりね」
響子が興奮気味に言った。
「ああ、ここもそうだけれど、どの部屋の壁紙も、最新の技術で当時と同じものが復元されているんだってさ」
と、ビルが言った。
「へえ、そうなんだ！」
カナダを代表する画家エミリー・カーの作品は、バンクーバー美術館のギャラリーに多数飾られているという。
「バンクーバー美術館には行った？」
ビルが訊ねた。
「いいえ。行こうかなって迷ったんだけど、結局、到着した日の午後は、スタンレー・パークのシーウォールをサイクリングしちゃったのよ」
と、響子は言った。
「スタンレー・パークか。あそこはいいね。広くて、いろいろ見どころがあって……。そうか、サイクリングしたのか……」
と、ビルが目を細めて言った。

「トーテムポールの広場に行ったわ。七本のトーテムポールが、海に向かって立っているの。その一本一本の作風が、少しずつ違っていてとっても興味深かった」
響子がそう言うと、ビルは首を傾げた。
「あれ、八本じゃなかったっけ？」
「え？　ちゃんと数えたけど、七本だったわよ」
と、響子は言った。
「おかしいな。僕も数年前に行ったことがあるけれど、そのとき数えたら確か八本あったと思うんだけどな……」
「変ね、一本なくなっちゃったのかしら？」
「キョウコが、一本見落としたんじゃないの？」
そんなはずはない……、と思う。
「絶対に七本しかなかったわよ」
「キョウコって、意外と頑固なんだね」
ビルが愉快そうに言った。
「だって、ほんとに七本だったんだもん！」
ビルにつられて、響子はなんだかムキになってきた。
「じゃあ今度、二人でもう一度、見に行こうよ！」
「いいわよ！」

響子が、売り言葉に買い言葉という感じで即座にそう返事をすると、ビルは、にやりと嬉しそうに笑った。
「やった！　これでまたデートの口実ができた！」
「まあ、ビルったら、そういうことだったのね」
（呆れたわ！）
だが、響子も、いつかビルとスタンレー・パークをサイクリングする日を夢見ている自分に気がついていた。
「約束したからね。ついでにバンクーバー美術館にも行って、エミリー・カーのギャラリーも見ようね」
ビルは、澄ました顔で付け足した。
（だめだわ……、どんどんビルのペースに巻き込まれていく）
そう思いながらも、響子はビルと話していると楽しくて仕方がなかった。
「そういえば、エミリー・カーの代表作に『キツウクラのトーテムポール』という作品があるわよね。私、写真で見たことがあるの」
「ああ。その作品も、バンクーバー美術館に飾られているはずさ。彼女はブリティッシュ・コロンビア州の各地を旅して、ネイティブ・カナディアンの村を訪ね、たくさんのトーテムポールを描いているんだ」
「失われつつあったネイティブ・カナディアンの文化を残そうと考えたのね」

と、響子は言った。
「そう。エミリー・カーの両親はイギリスからの移住者だったんだけど、エミリーは幼少の頃からカナダ人として育てられたんだ。そして彼女自身、絵の勉強のためにアメリカやフランス、そしてイギリスに暮らした時期もあったけれど、ずっとカナダへの愛着を強く持ち続けていて、故郷に戻ってからはブリティッシュ・コロンビア州の美しく素朴な景色を次々に描いている」
「詳しいのね」
「そりゃあ、僕も一応、カナダを愛するカナダ人だからね」
「ふーん」
少しだけ疑惑の目を向けると、ビルは頭を掻いて白状した。
「ほんとうは、学校の授業で習ったのさ」
「へえ。でも、それだけきちんと覚えているなんて、さすがだわ」
「そう?」
響子がおだてるように言うと、ビルは得意そうにまた話を続けた。
「エミリー・カーは、カナダのゴッホと呼ばれているんだ。晩年には心臓発作に襲われたんだけれど、その後も何点かの作品を仕上げている。死ぬまで、人の心の強さと自然の偉大さを描き続けた……」
「強い情熱の持ち主だったのね」

響子は感心して言った。
「ああ、そうだね。エミリーのように、生涯をかけて追い続けられるテーマを持っていることって、素晴らしいと思うよ」
「ほんとうに、そう思うわ。夢をもって生きていくって素晴らしい」
響子も、自分の夢を実現させようとして一歩を踏み出したのだ。
エミリーのような強い心を持ちたい。
響子は、二階のアトリエの壁に飾られた数点のエミリーの絵画を見ながら、そう念じていた。

4

ビーコン・ヒルズ・パークは、ダウンタウンの南、坂道を上りきったところにある広大な公園だ。
エミリー・カーの生家からは、目と鼻の先だった。
ここは、ビクトリア最大の公園で、花の名所のひとつでもある。
エミリーもときどきここを訪れ、花や草木を愛でていたという。
公園の名前の由来は、海を見渡せる見晴らしのいい丘の頂で、ビーコン（かがり火）を焚いて航海の目印にしたことからきている。

広々とした園内を歩き、道端に咲いている花や、池のほとりで羽を休めている野鳥を眺めていると、のんびりとくつろいだ気持ちになった。
「それにしても、いい天気……」
響子は空を見上げて言った。
「ビクトリアは降水量が少なくて、春先はずっと晴天が続くんだ」
と、ビルが言った。
「いいわね。日本はこの時季、雨が長く続いたりすることがあって、そうするとせっかく咲いた桜が、台無しになってしまうのよ」
日本の春先の天気は、ほんとうに滅茶苦茶だ。
『女心と秋の空』というけれど、響子は、秋よりも春のほうがより天気が変わりやすいように思う。
響子は、昨年の春は、エイプリル・フールに東京に雪が降ったことを思い出した。
「それじゃあ、日本に比べると、カナダの桜は開花期間が長いかもしれないね」
と、ビルが言った。
「そうね。桜は日本の花なんだけどな。正直言って、私、カナダでこんなに早く、それもこんなに美しい桜の花が見られるとは思わなかったわ」
園内の遊歩道に沿ってのんびりと歩いていると、響子は、少し先の芝生に巨大なトー

テムポールを発見した。
「あんなところに、トーテムポールが立っているわ！　なんだか、ずいぶん大きいような気がする……」
響子が指差す先には、天を突くように一本のトーテムポールがそびえ立っていた。
「このトーテムポール、スタンレー・パークで見たどのトーテムポールよりも、ずっと背が高いわ！」
近寄って、間近で改めてそのトーテムポールを見た響子は、驚いた。
「高さ三十九メートル。おそらく、州でいちばん高いトーテムポールじゃないかな」
と、ビルが言った。
「へえ、そうなんだ。それにしても、ビルって何でも知ってるのね」
響子は、つくづく感心して言った。
きっと、学校では優等生で通っていたのだろう。
「このトーテムポールは、過去の二回の大戦で犠牲になったブリティッシュ・コロンビア州のネイティブ・カナディアンを悼んで立てられたものなんだ」
と、ビルは解説した。
「そうなの……。でも、このトーテムポールの最上部にはサンダーバードが付いていないのね……」
響子は、少しがっかりして言った。

「キョウコは、サンダーバードがお気に入りなのかい？」
ビルが訊ねた。
「ええ、そうなの。スタンレー・パークのトーテムポールは、ほとんどが最上部に羽を広げたサンダーバードがいたのよ」
「サンダーバードはね、ネイティブ・カナディアンのコースト・サリッシュ族やクワキユートル族の伝説の鳥なんだ」
「ふうん。じゃあ、どのトーテムポールにも彫り込まれているわけじゃないのね」
響子は、ビルの言葉に頷いた。
「サンダーバードの伝説を話してあげようか？」
ビルが悪戯っぽい顔で言った。
「ほんと？　話して、話して！」
響子は目を輝かせた。
するとビルは得意げな顔で、
「それでは、ご期待に応えて……」
エヘンと咳払いして、少し芝居がかった調子で話し始めた。

——むかしむかし、大きな海に巨大なキラーホエールが棲んでいた。
あるとき、腹をすかせたキラーホエールは、海にいるサーモンをすべて食べ尽くして

しまった。
それで、毎年、カウチン川を遡ってくるはずのサーモンが一匹もいなくなってしまった。サーモンを主食にしていた人々は、食べるものがなくなって、飢えに苦しんだ。
彼らは儀式を行なって、天に祈りを捧げた。
すると、天から、「おまえたちは、私のために何をしてくれるか?」と、問う声が聞こえてきた。
人々はそれに応えて、「偉大な天の力を讃えて、トーテムポールを立てましょう」と誓った。
すると、にわかに天は暗転し、黒雲の中から雷鳴とともにサンダーバードが舞い降りてきて、キラーホエールをくちばしで捕らえると、山の奥へと運び去った。
その後、カウチン川には、再びサーモンが上ってくるようになったのだった。
おしまい——

ビルが話し終わると、響子はパチパチと拍手をした。
「へえ、ビル、どうしてそんな話を知ってるの?」
響子が感心してそう訊ねると、
「子供のころ、絵本で読んだんだよ」
と、ビルは少し恥ずかしそうに答えた。

「伝説って、面白いわね」
「カナダでは有名な話なんだよ」
「そう……」
カナダで生まれ育ったビルにとって先住民の伝説は、響子にとっての『桃太郎』や『かぐや姫』といった昔話のようなものかもしれない、と響子は思った。

トーテムポールを後にして少し歩くと、海が見渡せる南の遊歩道に出た。
遊歩道沿いの芝生に座って、二人はダウンタウンのサンドイッチ・ショップで買い込んであったランチボックスを開いた。
海を見ながら並んでパンに噛り付いていると、目の前の遊歩道を、手をつないで散歩する初老の夫婦が何組か通り過ぎていった。
「カナダのカップルって、歳をとってからも仲がいいのね」
響子がそう言うと、
「そうだな。カナダのカップルって、結婚を決めるまではけっこう慎重だったりするんだけど、この人こそ、というソウルメイトを見つけたら、一生を共にするパートナーとして、互いに相手を尊重しあって、関係を大切に育てていくカップルが多いかもしれないね」
と、ビルが応えた。

「それって、当たり前のことなのに、難しいわよね」
響子は、思わず真面目な口調でそう言った。
「キョウコは、日本に恋人はいたの？」
突然ビルに訊ねられて、響子は食べかけのパンをのどに詰まらせそうになった。ごほごほとむせながら、
「えっ、さあ、どうかしら……」
と、響子は思わず答えをはぐらかした。
「ごめん。変なこと訊いちゃったね」
ビルは頭を掻いた。
「そういうビルは、どうなの？」
響子が逆に聞き返すと、ビルはしばらく考え込んでから、
「う～ん、そうだな、いたような、いないような……。でも、誰か一人を真剣に好きになったことは、まだないのかもしれない」
と、言った。
たぶん、そのとおりなのだろう。
（ビルは、恋愛で深く傷ついたことなんて、一度もないんだわ……）
そう、響子は思った。
ビルの根っからの陽気さが、それを物語っていた。

「ねえ、さっきビルが言った、『ソウルメイト』って、素敵な言葉ね」
「うん。カナダの男性も女性も、相手を好きになったら割とオープンに交際するんだけど、その恋愛が発展して結婚を考えるようになると、クールにパートナーを選ぶんだ。セックスをしたからって、すぐに愛してるっていうわけじゃない」
「ふ～ん」
「結婚相手が、自分の家族や友達と楽しくやっていけるかどうかが大切な条件になるし、何より、その相手が自分にとってほんとうに『ライトパーソン』であるかどうか、『ソウルメイト』と呼べるかどうかが重要なんだよ」
「なんだか、ずいぶん真面目なのね。恋愛って、そんなふうに理想どおりにいくものなのかしら……」
響子は、あっけらかんとそんな理想論を語るビルが、少し憎らしくなった。
そして、カナダの男女は、不倫に苦しんだり好きな相手とうまくいかなくなって悩んだりしないのかと、毒づいてすべてをぶちまけてしまいたい衝動に駆られた。
だけどもちろん、そんなことはできなかった。
そんなことをしても何の意味もない。
これは、響子だけの傷みだ。
誰かに話して理解してもらうことでもなく、誰かに代わって苦しんでもらうわけにもいかない響子の心の中だけの問題なのだ。

そんなことは、よくわかっていた。
そんな響子の思いをよそに、ビルは話を続けた。
「日本人は、言わぬが花とか、以心伝心なんて言って、黙っていても心が通じ合うって考えるところがあるみたいだけれど、カナダでは、言いたいことはスピークアウトするのが、コミュニケーションの基本なんだ」
「日本人の美徳が通用しないのね……」
と、響子は言った。
「だから、カナダの女性は言いたいことをはっきりと言うから、夫婦喧嘩は凄まじいものがあるよ。僕の母さんも、父さんが生きていたころはすごい喧嘩をしてたな」
「えっ？　ビルのお父さんって、亡くなったの……？」
驚いて、響子は訊ねた。
「ああ。僕がハイスクールに通っていたころに、事故でね」
「そうだったの……」
思いがけずビルの哀しみに触れてしんみりしてしまった響子に、ビルは陽気に話し続けた。
「でね、夫婦喧嘩なんだけど、まだ僕が小さかったころ夜中に目を覚ますと、二人がすごい言い合いをしてたんだ。そのやり取りが恐ろしくて、僕は母さんにトイレに行きたいって言いだせなくて、とうとうお漏らししちゃったことがあるんだ」

「あらあら……」
「ま、僕のお漏らしのおかげであのときの喧嘩はおさまったんだから、感謝してもらいたいけどね」
響子は、ふふふと声を出して笑った。
そして、ビルは子供のころどんな様子だったのだろうと、あれこれ想像をめぐらせて微笑ましい気持ちになった。
きっと可愛いやんちゃ坊主だったんだろうな……。

ランチボックスを食べ終わると、満腹になって少し眠くなってきた。
ビルはすでに仰向けになって、ごろりと芝生に寝転んでいる。
「キョウコもこうすると、空が見えてとっても気持ちいいよ」
「そう?」
ビルに言われるまま、響子もそっと芝生に体を横たえてみた。青々とした芝生の、ひんやりとした感触が背中に伝わってくる。
雲のない青い空に、太陽が明るく輝いていた。
ふいにビルの腕が響子の首のあたりに伸びてきて頭の下に潜り込み、腕枕をする格好になった。
少し驚いたが、響子はされるままになっていた。

心地よくて、なんだかこのまま眠ってしまいそうだった。
「キョウコ、今、僕が何を考えてるかわかる？」
ふいに、ビルのかすれた声が聞こえた。
「どうしたの、ビル……」
「君にキスしたくてたまらないよ」
響子も同じ気持ちだった。
（キス、してもいいよ……）
そう言ってみようかと思った。
だが、響子は何も返事をせず、黙ってじっと横たわっていた。
ビルもそのまま、動く気配がない。
（やはり、日本人の以心伝心は、通用しないのかな……）
そんなことを思いながら、なおも響子が息を潜めて動かずにいると、やがて隣からスースーと規則正しい寝息が聞こえてきた。
静かに首を回してビルのほうに顔を向けると、ビルは目を閉じて口を半開きにしてすっかり寝入ってしまっている。
（なんだ、ビルったら、ほんとうに眠ってしまったのね）
少し期待していたのに……。
響子はそっと起き上がって、ビルの寝顔を真上から見つめた。

睫毛が長くて、鼻の形がとても綺麗……。
そして赤く、セクシーな唇……。
外国の男性の顔を、こんなに間近で眺めたのは初めてだ。
日本の男性の顔なら、美男子なのか、そうでないのかすぐに判断がつくけれど、ビルの顔は、客観的に判断するとハンサムな部類に入るのだろうか。
響子の目には、ビルの顔はハリウッド映画の何とかという二枚目俳優に似ているようにも見えるけれど、大雑把に言ってしまうと、外国人の顔はみな同じように見える。
響子は、ビルがぐっすりと寝入っているのをいいことに、そっと口付けしてみようかと、悪戯な誘惑を感じた。
けれど、結局、何もせずにそのままずっと、ただビルの顔を見つめ続けていた。

ビルが目を覚ましたのは、陽が西に傾き始めたころだった。
「起こしてくれたらよかったのに……」
ビルは、少し不満げに言った。
「でも、あんまり気持ちよさそうに眠っていたんだもの……」
響子がそう言うと、
「すっかり時間をとってしまったね。もう他の観光ポイントには行けそうもなくなっちゃったかな」

申し訳なさそうに、ビルが言った。
「いいのよ、私、観光客として来てるわけじゃないもの」
響子はビルの寝顔を見ているうちに、なんとなく幸せな気持ちになっていた。
だが、それはビルには内緒だった。
「そう？　だけど、ロイヤル・ブリティッシュ・コロンビア博物館なんかは、何か機会があったら見ておくといいよ。ビクトリアの歴史や自然がよくわかるから」
と、ビルが言った。
「へえ……」
「それから、さっき言いそびれたんだけど、そのすぐ近くにサンダーバード・パークという公園があるんだ。ネイティブたちの造ったトーテムポールが展示されている公園なんだよ」
「まあ、ほんと？　それは素敵！」
響子は目を輝かせた。
「キョウコがサンダーバードが好きなんだったら、きっと気に入ると思うよ」
「じゃあ、また案内してくれる？」
響子がそう言うと、ビルの顔がパッと明るくなった。
「うん、もちろん！　僕でよかったら、いつだってオカナガンから飛んでくるよ！」
「でも、大切なワイナリーはどうするの？」

響子が訊ねると、
「そうだな、それが問題だ」
ビルは、う〜むと唸って腕組みした。
そして考え込むふりをしながら、陽気に笑った。

「確か、この辺りに日本語の碑が立っているんだ」
帰る途中で、ビルがきょろきょろと周りを見回した。
「ほら、これ、なんて書いてあるの？」
ビルが灰色の石を指差していった。
「えっと、『願はくばわれ太平洋の橋とならん　新渡戸稲造』ですって……」
響子は、その碑に刻まれた言葉を読み上げた。
「へえ、どうしてこんなところに、その人の碑が立っているんだろう？」
「新渡戸稲造って、確かこのビクトリアで亡くなったのよ。何かの国際会議に来ていた帰りだったはずよ」
響子は、うろ覚えの知識を伝えた。
「ふうん。それはいったいどんなことをした人なの？」
ビルに訊かれて、答えに詰まった。
「詳しくは知らないんだけど、教育家でね、日本のお札の肖像になっているぐらいだか

ら、きっと偉い人なのよ」
「なんだ、いい加減だな」
ビルが笑った。
「だけど、バンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学のどこかに『新渡戸記念庭園』という、茶室や池のある純日本庭園があるはずなのよ。そこにも行ってみたいなと思ってるの」
と、響子は言った。
「行きたいところだらけだね」
ビルがまた笑った。
「だって、バンクーバーには、植物園や公園や美しい花が見られる場所がたくさんあるんですもの」
「じゃあ、こういうのはどう？　一カ月に一度、僕がキョウコを観光案内してあげるっていうの……」
「ほんとに？　とっても嬉しい」
「約束だよ」
「いいわ」
響子は微笑んで応えた。
ビルに毎月一回会えると思うと、なんだか嬉しくてうきうきする。

（もう、ギブ・アップみたい……）
いくらブレーキを踏んでも、恋のスピードには敵いそうもなかった。
「ねえ、指切りって知ってる？　日本で何かを約束するときにする、おまじないみたいなものだけど……」
「ううん？　どうやってするの？」
「こうして、小指を絡めてね、指きりげんまん　嘘ついたら　針千本　飲〜ます　指きった！　って歌うのよ」
「うわあ、針、千本も飲んだら死んじゃうよ。おっかない約束だね」
「ほんとね」
ビルに指摘されるまで、響子は歌の意味なんて、あまり考えたこともなかった。
だが、確かに子供のころは、今、ビルが言ったのと同じようなことを言って怯えていたことを思い出した。
最後に指切りをしたのはいつだっただろう？
響子は、ふとそんなことを思った。
「約束を破るとか、嘘をつくってことが、それほど重い罪なんだってことを思い知らせようとしたのかしらね」
少し考え込んで、響子は言った。
「うーん、やっぱり、日本人っておっかないかも……」

と、ビルは、言って、
「でも、僕は約束をちゃんと守るから大丈夫さ」
と、付け加えた。

あたりに夕闇が色濃く漂い始めていた。
「さあ、じゃあ、そろそろダウンタウンに戻って、ディナーを食べたら園芸センターまで送っていくよ。今夜から、僕の部屋を使うといい」
ビルのその申し出に、響子は素直に従うことにした。
「ありがとう、ビル。とっても助かるわ。ビクトリアであなたと最初に知り合えて、ほんとによかった……」
心から感謝の気持ちを伝えると、
「僕のほうこそ、昨日、アン叔母さんにワインを届けに来たおかげで、キョウコに会うことができたんだ。神様とワインに感謝しなくっちゃな」
と、ビルが言った。
「偶然の出会いね……」
「運命の出会いさ！」
「ビルったら！」

ビクトリアのダウンタウンは、バンクーバーに比べるとずっと規模が小さく、静かな佇まいをした街だ。
少し街を歩くと、百年以上もの歴史を持つ古い建物や博物館など、響子が興味を惹かれる場所がたくさんあった。
中でも、街の中心にあってビクトリアのシンボルともいえるのが、ブリティッシュ・コロンビア州議事堂だ。
州議事堂は中央に大きなドームを持つ左右対称の建物で、正面には芝生のスペースが広がっている。
インナー・ハーバーに面した広大な敷地内に堂々と建っているこの議事堂では、もちろん現在も州議会が開かれている。
響子たちが州議事堂の前を通りかかったのは、ちょうど夜の帳(とばり)がおり始めた時刻だったのだが、建物の壁の輪郭をなぞるようにいっせいにライトが灯り、州議事堂は見事なイルミネーションでライトアップされ、ビクトリアの街に浮かび上がった。
「素敵！　なんてロマンティックなの！」
響子は思わず感嘆の声を上げ、その光景に目を見張った。
「約三千三百個の電球でライトアップされているらしいよ」
と、隣でその様子を見ていたビルが言った。
「まるでお城みたい……。州議事堂だなんて思えないわ！」